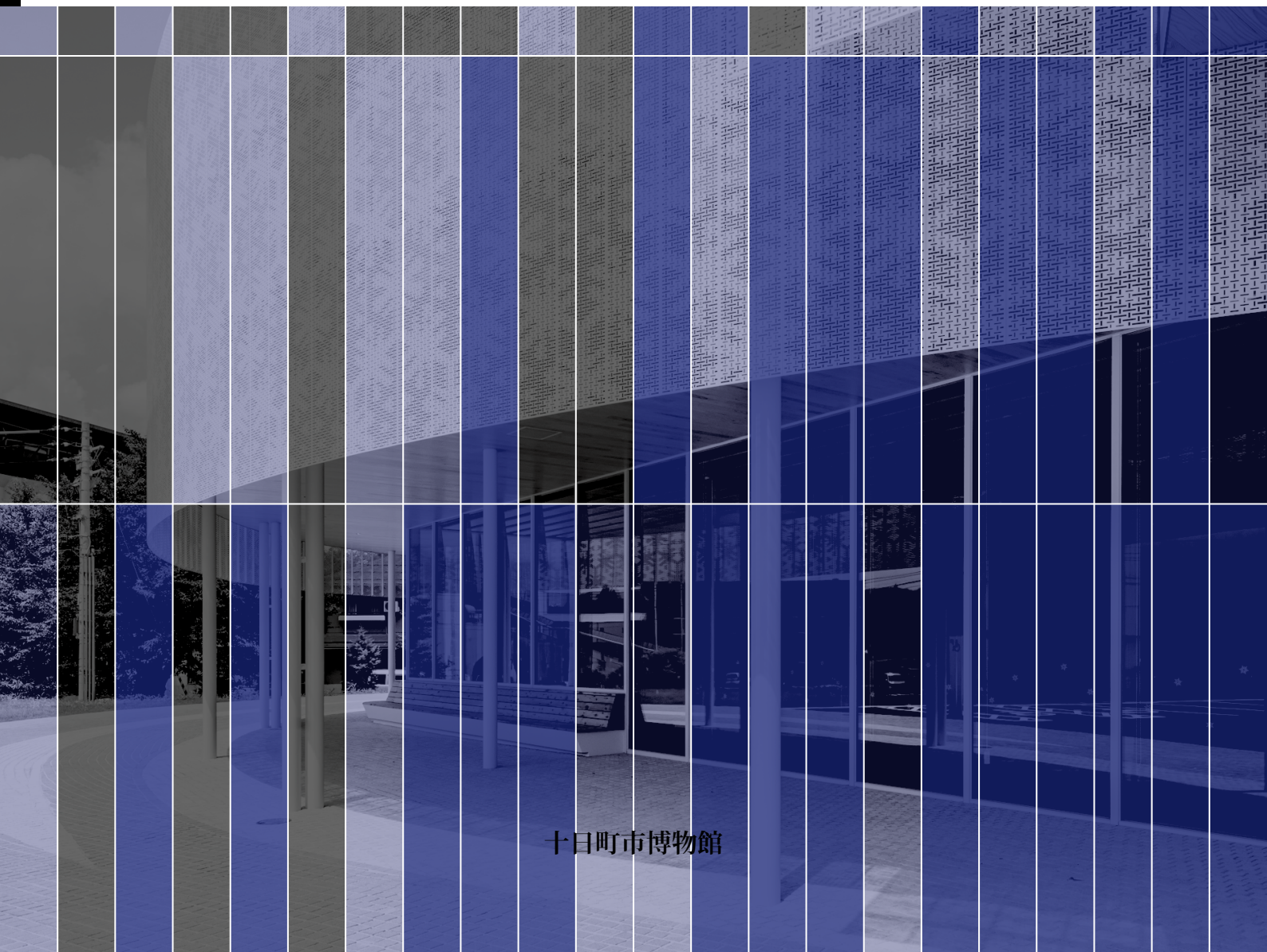
ISSN 2437-0118

十日町市博物館研究紀要

BUULETIN OF THE TOKAMACHI CITY MUSEUM

No. 1

March 2022



十日町市博物館

創刊にあたって

新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）は、令和２（2020）年６月１日に開館しました。新博物館は、「国宝・火焔型土器のふるさと－雪と織物と信濃川－」をテーマに、導入展示室「十日町プロローグ」、テーマ展示室Ⅰ「縄文時代と火焔型土器のクニ」、テーマ展示室Ⅱ「織物の歴史」、テーマ展示室Ⅲ「雪と信濃川」の４つの展示室で構成されています。「縄文時代と火焔型土器のクニ」の展示室には、国宝「笹山遺跡出土深鉢形土器群」と、火焔型・王冠型土器をはじめとする館所蔵の縄文土器コレクションが一堂に展示されています。「織物の歴史」の展示室では、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」を中心に展示し、古代から現代までの織物の生産工程や歴史などを通史的に理解することができます。「雪と信濃川」の展示室では、重要有形民俗文化財「十日町の積雪期用具」を中心に展示し、十日町市の歴史文化の舞台となる雪や信濃川について知ることができます。

博物館には、いわゆる「表の顔と裏の顔」があります。資料の収集、整理、保管（収蔵）、調査、研究という仕事は裏の顔であり、展示や教育普及などが表の顔であります。新博物館においては、文化財課と博物館という２つの組織が、車の両輪のごとく日々の業務に取り組んでいます。新博物館は、生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有しています。展示は実物資料を中心とし、映像、音声、模型、参加体験型展示などの手法も取り入れ、誰もが親しめるわかりやすい展示となるように工夫しています。また、解説文、音声ガイド、タッチパネルなどの多言語化（英語）にも取り組んでいます。今後、教育普及、情報発信にさらに力を入れていきたいと考えています。

このたび、新博物館の研究紀要が創刊のはこびとなりました。お蔭さまで、旧博物館での約40年の蓄積と新博物館開館後約２年の実績のうえに、ようやく調査・研究活動の一端を報告できるまでになりました。本誌は新博物館及び同館に関連する部署における調査・研究の成果を公開し、次に掲げる事項を達成することを目的としています。

（１）地域史の新たな１ページを創出し、市民・国民に情報提供することで、当地域文化への知的興味を呼び起こし、考えるきっかけづくりを行う。

（２）博物館等が展示会のバックグラウンドで日頃から調査研究を行っていることを市民に周知し、博物館業務への理解を広める。

（３）執筆者の学的研鑽を促して能力向上を後押しし、以て博物館の機能強化に繋げる。

掲載する原稿は、論文等（論文、研究ノート、報告）、資料紹介、新刊紹介などから構成され、オンラインジャーナルとして公表されます。

職員一同、なお一層の調査・研究活動の充実を図り、「十日町市の多様な歴史・文化などを保存・継承するとともに地域文化の拠点施設として発信するため」の努力を重ねてまいりたいと存じます。今後ともよろしくご指導、お力添え賜わりますようお願い申し上げます。

館長　　石原　正敏

十日町市博物館研究紀要第１号
目次

創刊にあたって　　石原　正敏

論文等

長岡における「犬の子朔日」の変遷　　阿部　敬　1

ミュージアム・マネジメントの実践（１）－新十日町市博物館の取り組み－　　石原　正敏　13

新刊紹介

中手地域づくり会　編　『中手集落史「萬日記覚帳」』　　阿部　敬　32

長岡における「犬の子朔日」の変遷

Transition of the "Innoko-Tsuitachi" in Nagaoka

阿部　敬 [1]

ABE Satoshi

犬の子朔日（インノコツイタチ）と呼ばれる２月１日の年中行事の変遷について、新潟県長岡市を中心にした文献資料の検討を行った。まず、文献資料を渉猟して各記録の時系列を整理し、内容の細目を抽出して比較することで、この行事の様々な要素が期日の近い多種類の行事と習合しながら、19 世紀中頃から 20 世紀前半にかけて特に釈迦涅槃の日の行事に次第に接近していく過程を明らかにした。次に、20 世紀前半から中頃のことと思われる記録・報告を対象に、涅槃会の団子まきに犬の子の団子が使用される事例との関係を類型化して、犬の子朔日が涅槃会の団子まきと習合した実態を具体的に明らかにした。また類型ごとの分布を示して、中山間地と平野部との違いや、南北で偏りがあることを明らかにした。このような他行事との習合や地域的偏りが生じている背景には社会・経済的相違や宗派における社会関係があるものと予想した。

はじめに

新潟県中越地域を中心にして、１月終わり頃（月遅れなら２月終わり頃）から米の粉などを練って十二支などの形を作り、２月１日（同じく３月１日）に障子の桟などに飾る年中行事がある（図 1）。この期日または行事を「犬の子朔日」（インノコツイタチ）という。17 世紀前半には行われていたといわれ、20 世紀前半までは行われていたが、現在は伝統を保存する目的以外で実施するところはないと思われる。犬の子朔日の行事の意味は、かつて実施していた人々でさえよくわからず、民俗学上においては諸説あるものの、未だ明らかにされているとは言い難い。また行事の歴史的な検討も行われたことはなく、変遷の実態もまったくわかっていない。しかし十日町の節季市で売られ人気を博しているしんこ細工「ちんころ」がこの行事に関連するとの示唆や見解がかねてよりあり（例えば山口 1967, 上村 2007、溝口 2012a, 2014a）、この行事について詳しく検討することは新潟県域の独特な文化の一端を明らかにするだけでなく、十日町市の歴史文化にとっても意義があると思われる。そこで本稿では、犬の子朔日の実態解明の端緒として、中心地のひとつである長岡を例にとり（註 1）、その歴史的変遷を明らかにすることにしたい。

１．研究の背景

これまでの犬の子朔日の研究は、記録や聞き取りを主とする民俗調査報告に簡潔な所見がつくものがほとんどで、この状況が長らく続いてきた。地域社会にとって必要な共同行事と異なり、各家で営まれ、しかも意味が認識されていないという性質からすれば当然かもしれない。これらの記録や民俗調査報告については次項で詳しく検討するので、先にこの行事に関する諸見解を見てみよう。

越後国長岡藩の儒学者、秋山朋信（景山）は徳川幕府の祐筆である屋代弘賢から出された問状（1814 年頃）に対し、回答文書として「越後長岡領風俗問状答」を提出した。1817 年頃の執筆とされている。二月朔日、牛馬鶏犬などを米の粉で作り、窓の縁に飾る（鈴木 1990）とあり、期日や内容が犬の子朔日と重なる。秋山は、行事の意味が知られていないことを指摘した上で、土牛を作って寒を送る風習のなごりではないかと推測した。小泉蒼軒（氐計）は秋山の答書の写本と解題を『北越月令』に著して、この習俗が越後国の中央部（中越地域）にあるが、なお検討が必要と述べた（鈴木 1991）。

明治期の新潟県の先駆的な民俗学雑誌『越後風俗志』

1　十日町市博物館　〒 948-0072　新潟県十日町市西本町一丁目 448 番地９

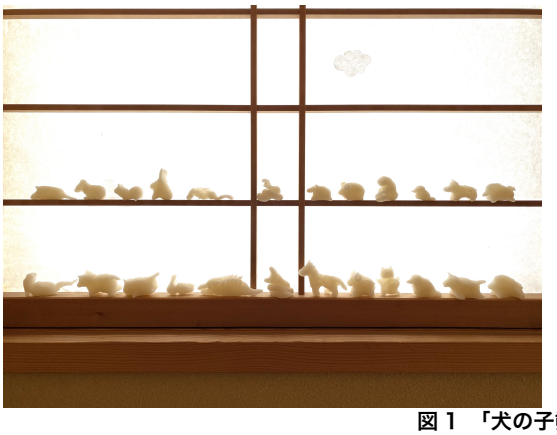


図１　「犬の子朔日」の再現

左：上下段ともに十二支。右：左写真の拡大。見附市史編集委員会（1985; p.154; 写 43）および三条市史編修委員会（1982; p.492; 写 1）を参考にした。「犬の子」作成：筆者・阿部優、撮影：筆者。

に、創刊者でもある大平與文次の言及がみられる（大平 1895）。それによると、「最も古き習はせにや元和寛永頃の書にも間々見ゆ　其説種々あれど何れも信じるに難し　今尚ほ信濃川へり村々にては此遺風あり」という。この行事に関する記述が元和（1615-1624 年）・寛永（1624-1644 年）年間に遡り、これまでに行事の意味に関する記述が種々あることも述べている。該当する文献が不明のため今後の検証が必要である。信濃川流域に分布するという認識はのちに新潟県教育委員会によってまとめられた調査報告書（新潟県教育委員会編 1965）や横山旭三郎（1980）（図２）によって、中越地域を中心に存在するものと改められた。

犬の子を扱う他地域の行事との関連を推測する見解もある。中山太郎（1934）は「犬のこの朔」として、これと似たような風習が秋田県の農村にもあるが、何故犬のこというのかわからないとした。柳田國男は『越後風俗志』（大平前掲）などを引用して「イヌノコツイタチ」の項目を記し、中山と同じく秋田県南部の餅犬との関連をほのめかし、「もとは犬の子の形を主としたものであらう」（柳田 1939）などと推測した。犬の子朔日と秋田県南部の餅犬との類似についてはその後も指摘がある（西角井編 1958, 亀井 1996, 上村 2007, 溝口・中山 2011）。また涅槃会で犬の子をまく習慣が越後、佐渡、能登にあるとの指摘もなされた（溝口 2017b）。

犬の子朔日の行事としての意味にはほかにも、春亥の子説、豊産の予祝行事説、八朔対応説、インノコト説がある。このうち春亥の子説と八朔説はともに正月と盆、秋と春に似たような年中行事が存在したり連続性をもったりする「年中行事の構造」（総括的には田中 1992）を念頭に置いたものだろう。春亥の子説は出所が不明であるが、渡邊行一（1936）は南魚沼郡の民俗事例を報告するなかで「亥の子一日」の字をあて、のちに「十月十日の亥の子の祝いと何らかの関係があるのではないか」（渡辺 1971）とした。小林存（1935）は『北越月令』（小泉 1849）を引用して語彙集を記し、春亥の子説にはなお検討が必要だと述べた。のちにも「春亥の子ではないかとの説もある」と紹介するにとどめていたが（小林 1951）、鶴巻武則（1989）は『図説 日本民俗学 新潟』のなかでインノコ朔日を「春亥の子に相当」とした。山の神と田の神との関係を示唆する言及があるが、具体的にはよくわからない。

『年中行事辞典』（西角井編 1958: p.57）では、「犬の子朔日（いぬのこついたち）」の項で「秋田の餅犬や岩手の花かけにつながる初春の予祝行事から変化したもの」とした。「はなかけ」の項には「餅花と同じ豊産の呪法」（西角井編 1958: p.649）とある。

溝口政子（2010, 2012a）は８月１日にしんこ馬を作る瀬戸内海沿岸域の「八朔」に対応する行事と位置付けようとした。また、米の粉の犬には、犬の霊力をもとにした祓（はらえ）と、米の粉による豊作祈願の役割があるとし（溝口 2017a）、論拠は異なるが西角井（1958）と一部共通する意見となっている。

福井県のインノコトと関連する可能性について指摘されたこともあるが（民俗学研究所 1960a）、期日と内容が大きく異なり、名称以外の接点がない（田中 1962）として否定されている。

犬の子朔日について初めて詳細な検討を行ったのは横山旭三郎（1980）である。横山は「犬（戌）の子朔日」について見附市を中心にした自身の調査結果と既存の報告内容とをあわせて 20 例余りを集成し、同行事には供

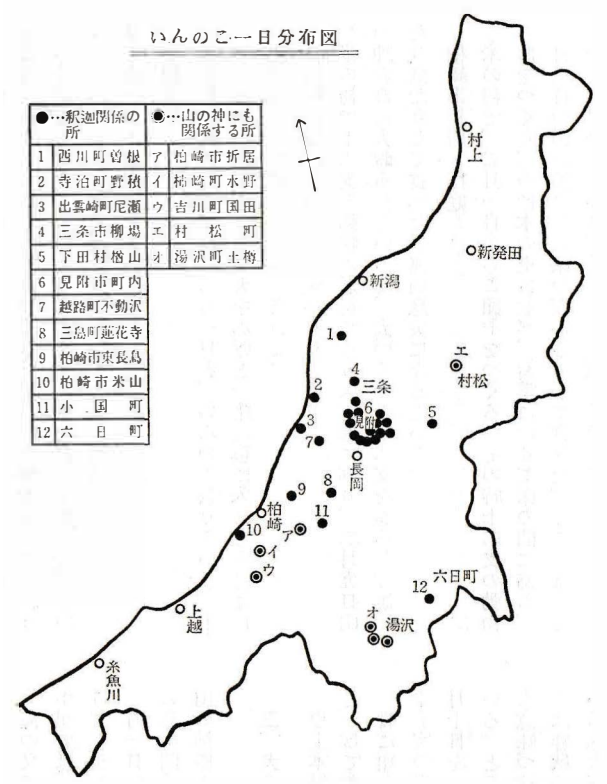


図２　「犬の子朔日」の分布（横山 1980 より）

物を下げる方法として、釈迦に関係するものと、山の神にも関係するものの二つの「系統」があって地域的に相違することを指摘した（図 2)。また、「犬の子朔日」の名称については、作った十二支をお釈迦様にあげ、たまたま近い期日に山の神の祭りがあったから習合したものと予想した。さらにノドクビリ団子と同一化している事例にも注目し、犬の子朔日とは本来別の行事との認識も示した。

この議論の特徴は、行事に様々な要素が習合した状態からそれぞれを分離して犬の子朔日本来の部分を抽出しようとしたことにあり、現在においても示唆に富んでいる。しかし分類した２つの系統から元来の行事要素を分離していないことや、諸事例の年代や時間的前後関係を扱ってないことなどにより、起源や変遷等の予想に根拠を与えることはできなかった。

以上のように、「犬の子朔日」の研究は、江戸時代後期から公表されてきた報告に基づき、その起源、意味、分布、他地域の行事との類似性などが考察されてきた。しかしまとまった議論を展開したものは横山（1980）のほかになく、未解決の課題は山積しているようにみえる。この行事の起源や元来の意味は本論でも明らかにしえないが、まず必要なことは横山の示した方向に則り、他行事との分別および習合の実態と行事の変遷の解明ではなかろうか。これにより現代に生きる行事の由来を明らかにすることにもつながるだろう。

２．歴史的変遷の検討

長岡ないし周辺の事例のなかから重要と思われる資料を抽出して古い方から順次検討し、行事内容の時間的変遷を見ていくことにする。これらの資料に認められた行事内容の諸要素は表１にまとめた。

(1)　1770 年代～ 1840 年代

犬の子朔日に関して、筆者の知りうる最古の記録は、1777 年（安永６年)、深沢村五郎八組割元格だった高頭三郎左衛門家の「年中家来賄方當テ仕事巻物諸事覚書帳」に登場する「犬の子朔日」である (大竹 1988:表 2)。覚書帳という資料の性質からいって、この時期すでに行事の期日と名称が固定していたと考えられる。「元和寛永頃の書にも間々見ゆ」とした大平（1895）の指摘する 17 世紀前半には遠く及ばないが、遅くとも 18 世紀後半にあったことは確実であり、これを遡ることは容易に想像される。

この記録に続いて２つの資料を見てみよう。

資料１　越後国長岡領風俗問状答

此日農家にて年中こほれ散りたる米をとりあつめて團子に調し、小豆をつけて喰ふ。是を土生 (つちふ) 團子といふ。又､牛馬鶏犬なとの形を米の粉にて作り、窓の縁に　飾る。如何なる故にや、もし土牛を作りて寒を送るの遺風にや。

19 世紀前半において最も重要な記録は幕府の祐筆、屋代弘賢が地方の風俗習慣を調査する目的で全国各地に発送した質問書「問状」に対し、越後国長岡領から提出された回答書である（資料１)。

前項でも記したように、この書は長岡藩の儒学者、秋山朋信によるもので、1817 年頃の執筆といわれている。ここでは原本に限りなく近い秋山家所蔵本（鈴木 1990）を挙げた。

秋山の記述にはふたつの行事が認められる｡前半の｢土生團子｣とは、「つじょうだんご」（松之山町史編さん委

表１　検討する主な歴史資料

資料番号	記録名	作成年（西暦）	地域（当時）	１次行為						２次行為			備考
				期日名 行事名	素材	製作物（名称）	期日	行為	場所	期日	行為	場所	
	年中家来賄方當テ仕事巻物定法物諸事覚書帳（大竹 1988 より）	1777	深沢村	犬の子朔日	-	-	-	-	-	-	-	-	
1	越後長岡領風俗問状答（鈴木 1990 より）	1817	古志・三島・蒲原郡	-	米の粉	牛馬鶏犬なと	２月１日	飾る	窓の縁	-	-	-	
	農家年中行事記（土田ほか 1980 より）	1839	三島郡浦村	犬の子朔	米粉	十二支	２月１日	並列する	戸のさんかまち	-	-	-	
2	北越月令（鈴木 1991 より）	1849	古志・三島・蒲原郡	犬をつくる -	こぼれちりたる米 米の粉	牛馬鶏犬 犬	２月１日	かざりおく かざる	障子及び板戸のふち 盆	-	-	-	上段：農家 下段：町家
3	越後長岡年中行事懐旧歳記（長岡市立中央図書館文書資料室 2005 より）	1877	長岡城下	狗の子朔日	団子	十二支	２月１日	並べ置く	障子の縁	-	-	-	
4	長岡市史「藩時代の民間年中行事」（丸田 1931）	1931	長岡市	-	団子	十二支	２月１日	供える	神仏	-	-	-	
5	越後風俗志第３集「一部落の風俗習慣」（大平 1895）	1895	信濃川へり村々	犬の子朔日	雑穀の粉	鳥獣虫	２月１日	並べ置く	障子戸のさんかまち	凡そ２週間後	-	-	
6	越志路第１巻第９号「小報告」（郷土博物館 1935）	1935	三島郡西越村	いんの子朔	團子	十二支獣其他	２月１日	吊るす	長押や鴨居の上	２月 15 日	撤く	寺・家の涅槃像の前	西越村は現出雲崎町
	昭和 31 年度民俗採報（国学院大学文学会民俗学研究会 1956）	1956	刈羽郡小国	-	団子	犬と鳥	２月 15 日	食べる	-	-	-	-	

員会 1991)、「つじょだんご」（五十嵐 1958)、「つじよだんご」（上田村郷土誌編集委員会 1976)、「チジュダンゴ」（水沢村史調査委員会編 1960）といわれているものと同一と思われ、鶏の餌にするような拾った米やくず米で作る団子のことを指している。この名称は以上のほかに岩船地方や関東にも類例があるといい（柳田 1999)、かつては広く認められた呼び方だったようである。正月の贅沢な食べ物を食べ尽くして「正月じまい」とするとか、くず米のほかに食べるものがないことを示して正月様にお帰りいただく「正月様送り」として行事化している。この行事の期日は１月 20 日（二十日正月という）や末日（晦日正月という）だが、２月１日に行う例もあり、本例がこれにあたると考えられる。この行事は以下「正月じまい」とする。

後半部分、牛馬鶏犬などの形を作って窓の縁に飾ることが犬の子朔日に該当する。前半の動物の形の素材を「米の粉」とし、土生團子とは分けていることから、別の製作工程を経るものと考えられる。期日あるいは行事名や牛馬鶏犬の意味が記されていないが、30 年ほどを経た 1839 年（天保 10 年）に記された浦村（現長岡市越路）庄屋の大平家の文書「農家年中行事」（土田ほか 1980）を参照すると、期日は「犬の子朔」、作るものは「十二支」とある。家畜を中心とするようにみえる動物のグループから十二支へと変化したのかどうか、いまはまだ即断できないが、その可能性もあることは留意しておきたい。

資料２　北越月令

農家にて年中にはにこぼれちりたる米をひらひ置きたるを、臼にて挽、晦日の夜小月には廿九日の夜團子をこしらひ、赤小豆をつけて食ふ。これをつちふだんごといふ。長岡邊にては二月朔日になす。

又、かの團子にて牛、馬、鶏、犬の形をつくりて、障子及板戸のふちにかざりおく。是を犬をつくるといへり。日数へて小児等やきて食す。町家にてはあらたに米をひきて犬をこしらへ、盆にかざりおきて小児をよろこばす。なにのゆゑと傳えもきかず。此事は中越後のみあるか、尚たずぬべし。

この資料は、1828 年（文政 11 年)、小泉蒼軒（氏計）が資料１を筆写して「長岡領答書」を刊行したのち、増補して 1849 年に出版した『北越月令』である（註 2)（鈴木 1991 による原本の翻刻)。資料１に比較して大幅な加筆が認められ、注目すべき内容となっている。

前半の段落は、資料１と同様に正月じまいを示す内容である。「長岡邉にては２月朔日に」とわざわざ断っていることから、通常はほかの期日に行うものとの認識がみえる。

後半が犬の子朔日に該当する。農家では動物の形も土生團子で作っており、正月じまいの要素が犬の子朔日に入り込んでいることがわかる。のちの時代には玄米粉、

麦粉、うどん粉、そば粉といった変異例もある（表２）。ここで資料１と資料２を比較のため一覧する。

【資料１】
①こほれ散りたる米の粉–土生團子–小豆をつけて食う
②米の粉–牛馬鶏犬なとの形–窓の縁に飾る
【資料２】農家
①こぼれちりたる米–土生團子–赤小豆をつけて食う
②こぼれちりたる米–牛馬鶏犬–障子及板戸の縁にかざりおく–日数経て小児等焼きて食す
【資料２】町家
①（記載なし）
②米の粉–犬–盆にかざりおき–小児をよろこばす

資料１では、米の粉で犬の子朔日を実施したが、資料２の農家では犬の子朔日に正月じまいが入り込んでいる。資料２の町家では、そもそも「こぼれちりたる米」が宅内にはないだろうが、米の粉でできた犬だけが独立し特別扱いされていることが注意される。ここでいう「盆」とは、機能的には神棚、仏壇の前や床の間に供え物をする際に使う膳などの類いと思われ、行為としては神仏に供えることに準じていると解せる。また小児が見て楽しむ飾り物や玩具のような側面もあったことがうかがえる。

小泉は正月じまいが本来は別の期日の行事との認識をもとに、犬の子朔日との間で習合が生じている事実だけでなく、同一の行事が家業によって素材、制作物の種類、場所も含めて異なっている事実も明らかにしたのである。

(2)　1850 年代～ 1960 年代

明治期にうつると、旧長岡藩士の小川当知が戊辰戦争で灰燼に帰した長岡城下を偲び『越後長岡年中行事懐旧歳記』（1877 年）を記した（長岡市立中央図書館文書資料室変編 2005）。越後城下の藩時代の行事を記録しており、そのひとつに「狗の子朔日」がみえる（資料３）。今泉木舌（鐸次郎）（今泉 1917）は『長岡三百年の回顧』のなかで「狗」の字を使用しており、小川のそれを参考にしたのかもしれない。丸田亀二郎が編集を担当した『長岡市史』（丸田編 1931）に「藩時代の民間年中行事」（資料４）がある。新潟県の民俗学雑誌として著名な『越後風俗志』には大平與文次（1895）による言及がみられる（資料５）。

昭和期に入ると事例報告が急増する。新潟県民俗学会の『越志路』誌上に、三島郡西越村（現・出雲崎町西越、資料５）と古志郡十日町村（現・長岡市十日町）在住者に対する「いんの子朔」についての取材記録が掲載され（郷土博物館 1935）（資料６）、南魚沼郡の「亥の子一日」（渡邉 1936）、刈羽郡の「いんの子正月」（金塚 1936）の調査報告も掲載された。国学院大学の『民俗採訪　三十一年度』には刈羽郡小国の「釈迦の命日」（国学院大学文学会民俗学研究会 1956）という事例が報告された。

『北越月令』（鈴木 1991）所収の「越後国長岡領風俗問状答」中の「犬の子朔日（インノコツイタチ）」に注目したのは『越志路』の創刊者で新潟県民俗学会を設立した民俗学者の小林存であった（小林 1937）。のちに新潟県民俗学会は新潟県下の総合的な民俗調査を行い（新潟県教育委員会編 1965）、犬の子朔日が中越地方を中心に存在することが確認される。中村賢俊はこの行事に興味を抱き、十日町市のちんころとともに柏崎市の聞き取り調査例を報告した（山口 1967）。ここでは重要な資料（３～６）を取り上げてみていく。

資料３　越後長岡年中行事懐旧歳記

朔日　狗の子朔日といふ
（中略）
団子にて十二支之形を拵ひ、障子の縁に並べ置、又団子を捻り、餡を付て食す、是れを咽縊り団子といふ、出代の奴婢、主家の善悪を他言すまじき爲なりといふ

これは『長岡城下之面影』（長岡市立中央図書館文書資料室編 2005）から引用した２月朔日の部分である。藩時代を振り返っての記述であり、小川の年齢からすれば資料１よりも後のことだろう。

前半部が行事としての「狗の子朔日」に該当する。漢字が異なるが、期日や素材は変わらず、作る形も大平家の文書から引き続き十二支である。

後半部は「咽縊り団子」（ノドクビリ団子）である。２月１日に奉公人・小作人の雇用契約の年度替りがあり、新たに（あるいは再び）奉公することを雇用主に約束させるため、雇用主が家に奉公人等を招いて食べさせたもので、餡をつけたり汁に入れたりする。ご馳走する

ことで、主家の善悪を他言させないとか、服従を約束させるなどの意味がある。期日にはノドクビリ朔日、轡（くつわ）朔日、出替り朔日などの名称もある。この行事は新潟県に多く（横山 1980）、筆者の確認した範囲でも、新潟県のほぼ全域と会津地方にも認められ、犬の子朔日の分布範囲よりも広い。ノドクビリ団子と十二支の団子が同一視されていた事例もあるが（国学院大学文学会民俗学研究会 1956, 三条市史編修委員会編 1982, 磯部 2006）、両行事は本来異なり（横山 1980, 三条市史編修委員会編 1982）、期日の近さや製作物の原料・製法の類似により習合したものと思われる。以下では、この期日、行事名をノドクビリ朔日とする。

資料４　長岡市史「藩時代の民間年中行事」

団子にて十二支の形を拵へて神仏に供え、捻り団子に餡をつけて僕婢に食はす、之を喉くびり団子といつて、出代わりの奉公人が主家の蔭口を言ふまじき寓意である。

これは 1931 年（昭和６年）、丸田亀太郎が執筆、編集した『長岡市史』（丸田編 1931）の「藩時代の民間年中行事」、２月朔日の部分である。

市史の監修を務めたのは『河井継之助傳』などで知られる郷土史家の今泉鐸次郎で、維新以前の歴史について整理された多量の文献を丸田に貸与し、注意、指導もおこなったという（同 p.5・6）。

このときに証言者を得たとしても幕末を遡った時期を探ることは困難であり、文献に依拠して執筆した可能性が高いが、典拠のほとんどは省略されている。

文の構成は資料２によく似ており、これを参照した可能性がある。しかし、十二支は桟や戸などの出入口に飾るのではなく、「神仏に供え」とある。誤記や誇張ではなく、実際に神棚や仏壇に供えられただろう。たとえば秋山（前掲）の記すところでは、２月朔日には単に「飾る」と著されているが、２月８日の「事始の事」については「神仏に供し奉る」との表現が見え、飾ることと神仏に供える事とは明確に区別されていた。神仏に供える行為は資料２の「盆にかざりおき」と同類とみてもよいだろう。また製作するものは資料２では犬だけだったが、ここでは資料３と同じく十二支になっており、種類の範囲が拡大していることもわかる。

のちの状況を見てみると、十二支を家庭で仏壇に供えた例は草生津（長岡市史編さん委員会 1990d）、町軽井（寺泊町 1988）、三島郡西越村（現出雲崎町）（郷土博物館 1935）の３件で、神棚の例も認められないことからすると、この記述が長岡の全体を代表するとは言い難い。しかし、十二支と神仏との関連が具体的行為として存在したことを示す点が重要である。

資料５　越後風俗志第３集　「一部落の風俗習慣」

農家にては２月朔日雑穀の粉を以て十二支に象り鳥獣虫の形を作り　宅内常に開かざる障子戸のさんかまちに凡そ二週間も並べ置けり　これ最も古き習はせにや元和寛永頃の書にも間々見ゆ　其説種々あれど何れも信じるに難し　今尚ほ信濃川へり村々にては此遺風あり　當日を名けて犬の子朔日と云へり

すでに一部紹介したが、この資料は『越後風俗志』に掲載された大平輿文次（1895）による紹介文である。

「雑穀の粉」は土生団子と同様の趣旨のものと思われ、先の「正月じまい」 が変異して犬の子朔日に部分習合した結果だろう。

犬の子朔日の十二支は同じで、置く場所にも変化がない。しかし、その期間に関する言及が初めて認められ、「凡そ二週間」とある。２週間後のその日は釈迦涅槃の日（２月 15 日）に重なるはずであり、盆にかざりおいたこと（資料２）や神仏に供えたこと（資料４）と密接であるに違いない。

資料６　越志路第１巻第９号「小報告」

いんの子朔には團子で十二支獣其他を作り長押や鴨居の上へ吊るし十五日まで置いて、十五日には更に紅白の團子を作り寺でも家庭でも釈迦の涅槃像を懸けその前で播き散らし近所の子供に與へます（三島郡西越村出身佐藤邦三氏報）

この「小報告」（郷土博物館 1935）は、会員に向けて投げかけられた質問に対する回答のようで、端々にそれとわかる表現が見える。

ここでも十二支が継続していることが確認されるとともに、終了日が明確に 15 日とされている。さらに釈迦涅槃に新たな團子とあわせて「寺でも家庭でも」団子まきをしたことが記されている。ここにおいて初めて犬の子（十二支）の扱いが涅槃会と習合し、寺の涅槃会にまで入り込んでいたことが確実になる。資料による限り、「犬の子朔日」という用語の出現に遅れており、この順

序を逆転させることは難しいのではなかろうか。

犬の子朔日が涅槃の日に入り込んだ上に、さらに変形をきたした事例もある。刈羽郡小国（国学院大学文学会民俗学研究会 1956）では、２月 15 日が「釈迦の命日」で、犬は釈迦のお供だといって、犬と鳥に形をした団子を子供に食わせるという。犬は正直で、鳥は早起きするからといって、これらの力にあやかるのである。のちの『小国町史』（小国町史編集委員会 1976）には「いんの子朔日」が記録されているので、犬の子朔日は失われていないと思われるが、犬の子朔日が釈迦涅槃の日と習合し、さらに２種類の動物だけが異なる意味を与えられているやや特異な状況である。20 世紀半ばの変異の多様性をみせている。

３．1970 年代～ 2000 年代の資料検討

長岡市は 1980 年代から民俗調査（長岡民俗の会 1985, 長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会編 1989, 1990a; b; c; d, 1992）を行い、調査地区ごとにその歴史とあわせた報告をまとめた。ほかに平成合併前の旧三島郡（近藤編 1937）、旧小国町（小国町史編集委員会 1976）、旧寺泊町（寺泊町 1968）、旧越路町（越路町史編集委員会民俗部会 1997）の記述や、旧栃尾市下塩（石丸 1977）の報告もある。横山（1980）は現長岡市にあたる範囲からも事例報告している。2000 年代になってからは、溝口が自身のブログにこの行事をたびたび取り上げており、涅槃会の団子まきの取材記録もある（溝口 2010, 2012b, 2014b; c; d）。

ここでは前項までと異なり、釈迦涅槃に関する事例が多く見られることから、犬の子朔日との習合関係を焦点にして検討してみたい。犬の子（エンノコ）などを作って行事に供するまでを１次行為とし、その後に認められる行為を２次行為としたとき、それぞれについて期日、行為、場所を抽出したのが表２である（註 3）。

１次行為と２次行為の内容の組み合わせによって犬の子の団子を用いる地域を以下の３つに類型化してみよう。この分類に基づき内容を見ていく。

１類：犬の子朔日のみを実施する地域
２類：１次行為として犬の子朔日を実施し、その後に涅槃会の団子まきやこれに関連のある２次行為を実施する地域
３類：犬の子朔日を実施せず、これに関連のあるほかの行事を実施する地域

(1)　１類

表２と図３の１～ 21 が該当する。犬の子朔日だけが独立して実施されている例である。犬の子朔日と神仏との関連が記録されたのは 19 世紀前半で、釈迦涅槃と関連付けられたことが明確に分かる記録は 20 世紀前半からである。担い手不足などで涅槃団子を作らなくなった地域もあるかもしれないし、寺の涅槃会の団子まきにまで及ばなかった地域もあるかもしれない。

しかし、製作物に意味付けが認められる例は来迎寺（縦櫛障子の横桟に飾る「色々の動物」は「釈迦の涅槃に居合わせた」とある。）の１例にすぎず、おろす日も特定されてないため、そもそも涅槃会との関連付けが進まなかった可能性のほうが高い。したがって犬の子朔日の元来の状態を残しているのはこうした例のなかに多くみられるのではないだろうか。

(2)　２類

表２と図３の 22 ～ 29 が該当する。この類型における２次行為は一見多様である。①食べる（乙吉、柿、六日市、新長・竹森・鰐口、野積）、持ち歩く（神谷）、②お参りした人に配る（町軽井）、③撒く（下桐・硲田・木嶋・五分一）、④寺で新たに作って撒く（雲出、脇川新田、亀貝・富島・宮下、槇下、加津保・桂・亀崎）といった例がみられる。

このうち②～④は当然に釈迦涅槃会に埋め込まれていると考えられる。①のうち期日が涅槃会（２月 15 日）と重なり、持ち歩くものは釈迦団子になぞらえたものであろうと思われるが、②～④と比べると、関連の度合いは低い。

エンノコ朔日における十二支の役割は、釈迦のお供（雲出、脇川新田）とか釈迦についてきた動物（栖吉）だといい、その効力は「食べると達者になる」（亀貝・富島・宮下）ことが期待されていた。しかし効力を記録していたのはこの１例しかなく、行事の意味とともに効力もが明らかでなかった。他方、涅槃会にもちいられた動物等の場合は、インノコを拾って食べれば風邪をひかない（雲出）、エゴノコを拾うと福が授かる（脇川新田）、十二支を拾うと縁起がいい（亀貝・富島・宮下）、エンノコは金を生む（加津保・桂・亀崎）といった事例が認

表２　1970 ~1990 年代の犬の子朔日関連記録

番号	地域（当時）	１次行為						２次行為			備考	文献
		期日名 行事名	素材	製作物（名称）	期日	行為	場所	期日	行為	場所		
1	大積高鳥	エンノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	飾る	-	-	-	-		長岡民俗の会 1985
2	摂田屋	エンノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	並べる	障子の桟	-	-	-		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990d
3	川辺	エンノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	並べる	障子の桟	-	-	-		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990c
4	芹川	エゴノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	並べる	障子の桟	-	-	-		長岡民俗の会 1985
5	黒津	エンノコ朔日	米の粉	エンノコ	３月１日	並べる	障子の桟	-	-	-	月遅れ	長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990b
6	王番田・寺宝・河根川	-	米の粉	十二支のエンノコ	３月 25 日	並べる	障子の桟	-	-	-	月遅れ	長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990a
7	小国	いんの子朔日	しん粉	十二支	２月１日	並べる	障子の桟など	-	-	-		小国町史編集委員会 1976
8	来迎寺	犬の子朔日	団子	色々の動物	２月１日	飾る	竪櫛障子の横桟	-	-	-		三島郡誌編纂委員会 1973
9	百束	エンノコ朔日	米の粉	十二支のエンノコ	２月１日	飾る	戸の桟や鴨居	-	-	-		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990c
10	西谷	インノコツイタチ	米の粉	十二支の動物	２月１日（本正月にも）	飾る	障子の桟や鴨居	-	-	-		越路町史編集委員会民俗部会 1997
11	西野	-	米の粉	インノコ	２月 15 日	ならべる	障子の桟や鴨居	-	-	-		越路町史編集委員会民俗部会 1997
12	宮本東方	エンノコ朔日	米の粉	十二支	-	並べる	欄間や障子の桟	-	-	-		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990c
13	村松	いんのこ朔日	粳米粉	十二支の動物	２月１日	並べる	茶の間の長押	-	-	-		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990b
14	寺泊	エンノコ朔日	マゴメ	十二支	２月１日	飾る	床の間	-	-	-		寺泊町 1988
15	草生津	エンノコ朔日	しんこ	犬のようなもの	２月１日	供える	仏壇	-	-	-		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990d
16	乙吉（亀崎）	インノコ朔日	-	十二支のインノコ	２月１日	並べる	戸の桟	２月 15 日	食べる	家庭		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990c
17	柿	エンノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	並べる	障子骨	-	焼いて食べる	家庭		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990d
18	六日市	エンノコ朔日	米の粉	十二支（エンノコ）	２月１日	飾る	床の間	２月７日～10 日	焼いて食べる	家庭		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990b
19	新長・竹森・鰐口	エンノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	飾る	障子の桟など	-	紙鉄砲で撃ち落として焼いて食べる	家庭		寺泊町 1988
20	野積	-	-	十二支	２月１日	飾る	鴨居	２月 15 日以降	春田に出る時に焼いて食べる	家庭		横山 1980
21	神谷	エンノコツイタチ	米の粉	十二支の動物	２月１日	飾る	鴨居や障子の桟	-	持ち歩く	家庭		越路町史編集委員会民俗部会 1997
22	町軽井	エンノコ朔日	麦粉	十二支	２月１日	並べる	仏壇	-	お参りした人に配る	家庭		寺泊町 1988
23	下桐・硲田・木嶋・五分一	エンノコ朔日	玄米粉	十二支	２月１日	飾る	障子の桟など	２月 15 日	撒く	家庭		寺泊町 1988
24	雲出	涅槃会	団子	十二支のインノコ（亥の子）	２月 13・14 日	並べる	障子の桟	２月 15 日	子どもが焼いて食べる 寺ではインノコを作って供えて撒く	家庭 寺	香林寺	長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990a
25	栖吉	エンノコ朔日	米の粉	十二支	-	並べる	戸の桟	２月 15 日	おろす 寺ではトリの形の団子を作って撒く	家庭 寺		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990a
26	脇川新田	エンノコ朔日	マゴメ（粳米）粉	エゴノコ（犬の子）や十二支	２月１日	並べて飾る	障子戸の桟	２月４日	おろす 寺ではエゴノコを作って撒く	家庭 寺		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990a
27	亀貝・富島・宮下	エンノコ朔日	米の粉	十二支の動物	２月１日	並べる	障子の桟	２月 15 日	おろす 寺では十二支を作って供えて撒く	家庭 寺		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990b
28	槇下	エンノコ朔日	白米	犬や猫、狸などの動物の形（エンノコ）	２月１日	並べる	障子戸の桟	２月 15 日	寺では犬や兎を作って撒く	寺		長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1989
29	加津保・桂・亀崎	エンノコ朔日	米の粉	十二支	２月１日	並べておく	障子の桟、仏壇、床の間	２月 15 日	おろす 寺では十二支を作って撒く	家庭 寺	龍晶庵（加津保）	長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1989
30	下塩	みそかそば	そば粉	犬（犬ころ）	２月 28 日か 29 日	串に刺して焼いて食べる	家庭	-	-	-	月遅れ	石丸 1977
31	東谷（阿蔵平）	お釈迦様の日（団子撒き）	米の粉	十二支・白団子	２月 15 日	配る	寺	-	山で持ち歩く、食べる	-	延命寺（昔は堂）	越路町史編集委員会民俗部会 1997
32	東谷（荒瀬）	お釈迦様の日（団子撒き）	米の粉	十二支・白団子	２月 15 日	配る	寺	-	山で持ち歩く、食べる	-	観音堂	越路町史編集委員会民俗部会 1997
33	山ノ脇	お釈迦様の日（ダンゴまき）	米の粉	十二支	２月 15 日	撒く	寺	-	袋に入れて吊るす	-		寺泊町 1988
34	蓮花寺	-	米の粉	十二支の動物	２月 15 日	供えてから撒く	仏様（家庭）	-	-	-		横山 1980

められ、効力を記録した例が多い。涅槃会への関わりの強さがこうした効力への認識を強くさせていたに違いない。

その効力の内容が健康、招福、金運といった「得られるもの」に焦点があることも注意される。同じく涅槃会で撒かれる小さく丸い団子（涅槃団子）の効力をみてみると、「焼いて食べたり、腰にぶらさげて山へ行くと蛇にくいつかれない。玄関に紐で吊るしておくと災難除けになった」（下桐・硲田・木嶋・五分一）、「食べるとオコリの薬になり、身体が丈夫になる」（脇川新田）、「山へいくときに持っていくと、蝮に咬まれたり毒虫に刺されない」（亀貝・富島・宮下）、「腰につけて山仕事へ行くと蛇に食いつかれない」（加津保・桂・亀崎）といったように、山仕事での蛇・虫除け、災難除け、健康に効力が期待されており、概ね「除け」に焦点がある。インノコのそれと部分的な重なり（健康）はあるものの、自ずと異なるのである。

エンノコ朔日の団子は涅槃会に関連付けられることで効力を認められ、そうでありながらも効力の内容を涅槃団子と分別することにより固有の地位を確保したのではないだろうか。

(3)　３類

表２と図３の 30 ～ 34 が該当する。犬の子朔日の記録がないにもかかわらず、犬の子の団子を利用して年中行事を行うものがある。東谷（阿蔵平、荒瀬）、山ノ脇、蓮花寺、下塩がこれにあたる。このうち前４例は涅槃会に関係するもので、いずれも供えてから撒くか配る。こうした状況になっている原因としては、もともと犬の子朔日がないところに犬の子の団子を含む団子まきが招来された可能性と、かつて実施していた犬の子朔日が失われてしまい、団子まきに習合した２次行為だけが残った可能性とが考えられるが、今回検討している範囲では犬の子朔日の分布域が３類型の中で最も広く全体を覆っており、犬の子朔日の伝統がなかった地域を考えることは難しい。したがって後者の可能性のほうが高いものと考えておきたい。

実際、犬の子朔日の存在が消えゆく移行過程を示す事例がある。雲出では２月 13・14 日に家庭で障子の桟に十二支のエンノコ（亥の子）を飾って 15 日に食べ、香林寺（曹洞宗）でもエンノコを作って 15 日の涅槃会の団子まきにいれるのだという。すでに「エンノコ朔日」という行事名はなく、始期が後ろにずれて家庭と寺の涅槃会とが同時進行となっているのである。

エンノコを拾って食べれば風邪をひかない、味噌に入れるとかぶれないといったが、これは涅槃団子にも共通する効力で、前項のような分別がない。家庭のそれは、もはや涅槃会の家庭版、あるいは涅槃会の一部といってもいいだろう。香林寺のエンノコを混ぜた団子まきは溝口（2014b）が記録しており、近年でも続いているようである。

また、山ノ脇では「お釈迦様の日」に撒いた十二支の団子を涅槃団子と一緒に袋に入れてぶら下げておくと魔除けになったという。この「除け」の効力を期待する例は上述のように涅槃団子に特有のものであるから、ここでは釈迦涅槃に接近したことで獲得された十二支固有の効力はすでに失われたものとみられる。

残る１例（下塩）は、興味深いことに２月 28 日か 29 日（月遅れ）に「みそかそば」と称してそば粉で犬（犬ころ）を作り、焼いて食べた。「これこそ正月の終わりであった」（石丸 1977：p.18・19）という。これは月遅れの旧正月と大晦日のそば、雑穀の粉を使う正月じまい、戸の桟などに飾ることから離れた犬の子朔日などが多重に習合し、みそかそばの内部に吸収されたものと思われる。もとの行事から遊離して別の行事に習合したという点では、ほか３例と同類である。この犬（犬ころ）の効力は「食当たりせぬ」（石丸 1977: p.21）という健康に関わるものであった。

(4)　分類と分布

以上の分類に基づいて分布状況を示したのが図３である。

１類には、表２と図３のうち１～ 21 が該当する。現在の長岡市の西側に広く分布していることがわかる。東側の中山間部を中心とする旧栃尾市の大半、旧山古志村、旧川口町には認められない。

２類は同じく 22 ～ 29 が該当する。２次行為が寺の涅槃会の団子まきとなるもの（24 ～ 29）が６件、これに類するもの（22・23）が２件ある。分布は明らかに長岡市北半に偏っている。家庭行事としてだけでなく、寺の行事としても確立しており、この分布の偏りの背景には集落間の関係とともに寺間の関係（例えば宗派内の社会関係や僧の異動）もあったと予想される。参考として、溝口の取材した鳥越の香安寺と逆谷の寛益寺を「そ

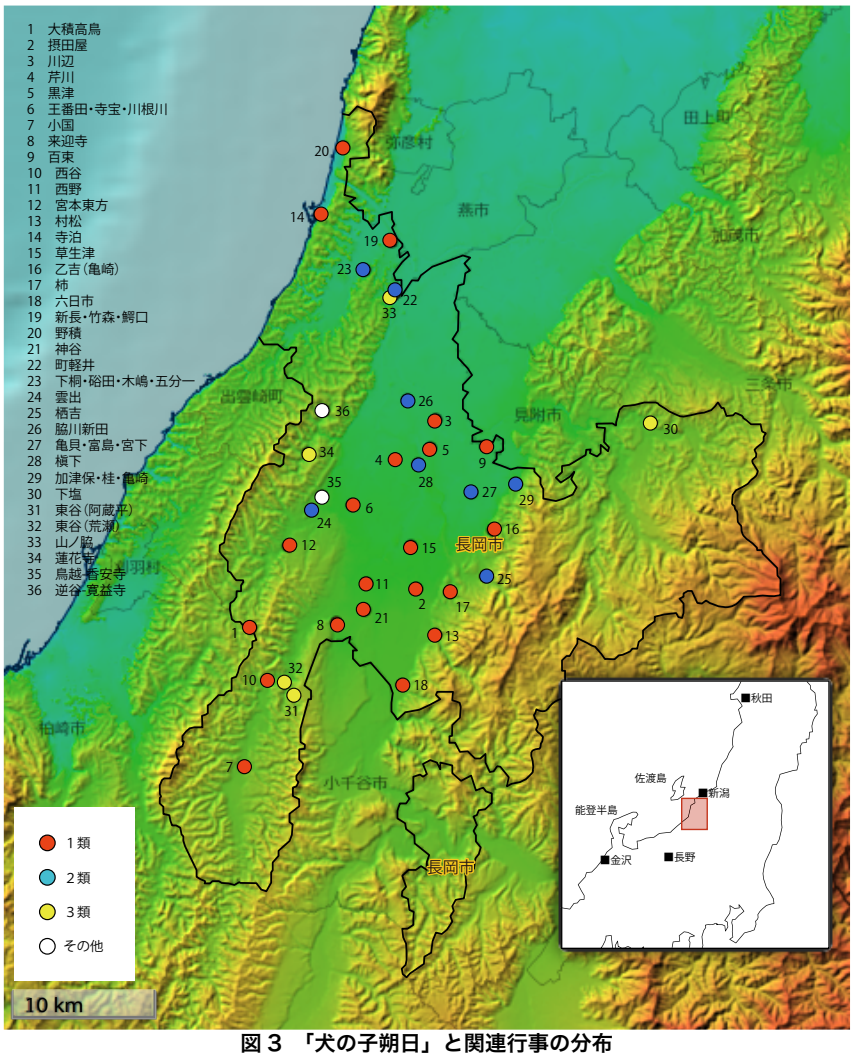


図３　「犬の子朔日」と関連行事の分布

1, 4: 長岡民俗の会 1985、28, 29: 長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1989、6, 24, 25, 26: 長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990a、5, 13, 15, 18, 27: 長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990b、9, 12, 16: 長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990c、2, 17: 長岡市史編集委員会民俗・文化財部会 1990d、7: 小国町史編集委員会 1976、8: 三島郡誌編纂委員会 1973、10,11, 21, 31, 32: 越路町史編集委員会民俗部会 1997、14, 19, 22, 23, 33: 寺泊町 1988、20, 34: 横山 1980、30: 石丸 1977、35: 溝口 2014d、36: 溝口 2014c. 国土地理院地図により作成して加筆

の他」として図３（35 と 36）に掲載した。本論の分類では２類か３類になると思われるが、いずれであっても分布傾向に影響のないことがわかる。

３類は同じく表２と図３のうち 30 ～ 34 が該当する。長岡市中心部からみて東西に分布が離れ集中性はなく、むしろ地形的に中山間地域にあることに特徴がある。同様の立地にあっても等しく３類になるわけではないため一概には言えないが、犬の子朔日を失う背景には強い動機を持たない行事を継承しえない、中山間地域に特有の社会・経済的要因があったのではなかろうか。

以上の諸例から、資料的には 1970 年代以降、実質的にはおそらくこれより数十年前には、犬の子朔日は「エンノコ朔日」と呼ばれることが多くなっており、釈迦涅槃と関連づけられ、前項で認めた傾向は広く認められるようになっていた。この関連づけの結果、釈迦涅槃の日に合わせて犬の子団子を涅槃団子にまぜて撒くような事例が認められ、さらに中山間地域を中心にして犬の子朔日を実施せずに犬の子団子を涅槃会で撒くという地域も生じていた。犬の子朔日は釈迦涅槃との接近を始まりとして、次第に涅槃会に編入され、団子まきの団子に吸収されるようにして習合していったと考えられる。

４．結論

（１）18 ～ 20 世紀初頭

犬の子朔日は、17 世紀前半からあるという説があったが、現在確認できる資料上の初出は 18 世紀後半（1777 年）で、２月１日が「犬の子朔日」とされていた。

19 世紀前半には農家で米の粉で牛馬鶏犬あるいは十二支を作り２月１日に窓のふち、戸の桟などに飾る行事として定着していた。その意味は伝わってなかったが、19 世紀のうちには犬だけ、あるいは十二支を神棚、仏壇に供えることがあり、この頃には正月じまい、ノドクビリ朔日との部分的な習合が認められ、また神仏となんらかの理由により関連付けが行われたとみられる。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、障子の桟などに飾ったあと、２週間ほど置いて釈迦涅槃の日におろすようになり、場所や期日の変異によって次第に神仏に関する行事に接近していったと考えられる。このような接近は、行事の元来の意味が失われていたことに起因して、新たな意味を与える効果を持っていたと推測される。

（２）20 世紀前半以降

20 世紀前半には、２月１日はエンノコ朔日と呼ばれ

ていた（註 4）。この頃には釈迦のお供などと言って米の粉で十二支を作り、障子の桟等に並べ、涅槃の日である 15 日頃におろして食べる行事となった。

おろす際に家庭や寺で涅槃会の団子まきで撒く地域もあり、明らかに涅槃会の一部とする地域が現れた。涅槃会に用いられたエンノコの団子は、招福や金運が期待されており、拾って携行すると蛇除け等のご利益があるといわれた涅槃団子とは異なる効果を期待された。犬の子朔日の行事としての意味は仏教行事と組み合わせることによって再構築されたとみられる。

20 世紀後半には、エンノコ朔日として現在の長岡のほぼ全域で記録されていた。実際に行われた時期はこれより幾分か遡るかもしれないが、長岡市北部を中心に家庭でエンノコ朔日を実施し、寺で涅槃会の団子まきにエンノコを混ぜる地域がある一方で、平野縁辺部や中山間地ではエンノコを混ぜた団子まきだけを実施する地域があった。犬の子朔日が失われ、エンノコの団子が涅槃会の団子に習合した状況だけが残る地域が現れたものと考えられる。このような残存状況には長岡における市街地と周縁部との社会・経済的状況の違いや寺院間の社会関係が関連していると予想されよう。なお、21 世紀の現在は、犬の子朔日はほぼ廃れているが、涅槃会の団子まきに犬の子の団子を混ぜて撒く寺はまだ存在する。

おわりに

犬の子朔日という新潟県に独特な行事について、これまで公表されている記録や論考を対象として、その中心地の一つである長岡の 18 世紀後半から 21 世紀までの変遷を辿ることができたのではないだろうか。エンノコを混ぜた涅槃会の団子まきが犬の子朔日の変異・習合したものであることは以前より予想されていたが、今回の検討によってその歴史的変遷を初めて明らかにすることができた。犬の子朔日を実施していた他の地域の検討にとっても重要な成果となりうるだろう。今後の議論の積み重ねによって、研究史上に現れていた諸課題の解明に近づくことを期待したい。

謝辞

高橋理信氏、山下敦司氏、阿部美記子氏、門脇洋子氏、三国信一氏、大楽和正氏、溝口政子氏、長岡市立中央図書館文書室、十日町情報館には文献渉猟等の便宜を図っていただきました。髙橋由美子氏、山本哲也氏、中町保夫氏、角山誠一氏、大島一夫氏には貴重なご助言ないしは聞き取り調査へのご協力をいただきました。犬の子朔日の再現については阿部優氏にご協力をいただきました。末筆ながら以上の方々に感謝申し上げます。

註

1：正確には現在の長岡市と周辺域の数例を扱う。

2：「大正末年」（1926 年）、宮正純が小泉の 2 書をまとめて 30 部の謄写版を作成した（平山 1969c、鈴木 1991）。なお、この謄写版を底本にして校訂等されたのが、『諸国風俗問状越後国長岡領答書』（河本 1935）、『校註 諸国風俗問状答』（中山 1942）、『日本庶民生活史料集成』第 9 巻（平山ほか 1969）のうち「越後國長岡領風俗問状答」・「北越月令」（平山 1969a;b）である。

3：不動沢（横山 1980）は名前だけが残っていただけで、また逆谷の寛益寺（溝口 2014c）、鳥越の香安寺（溝口 2014d）の例は寺の涅槃会を記録した近年の貴重な報告だが、犬の子朔日の有無が把握できないので、それぞれ参考にとどめる。

4：新潟県では「イ」と「エ」の発音が混同されることがよくあるため文字通り変化したかどうかは明確にしえない。

引用参考文献

平山敏治郎　校訂・編　1969a「越後國長岡領風俗問状答」『日本庶民生活史料集成』第 9 巻、p.540-557、三一書房

平山敏治郎　校訂・編　1969b「北越月令」『日本庶民生活史料集成』第 9 巻、p.558-593、三一書房

平山敏治郎　1969c「解題　越後長岡領風俗問状答」『日本庶民生活史料集成』第 9 巻、p.834、三一書房

五十嵐伊三郎　編　1958『解村記念 五十沢郷生活誌』、五十沢郷土研究会

今泉木舌　1917『長岡三百年の回顧』、北越新報社

井之口章次　2001「諸国風俗問状答」『日本大百科全書』、小学館、https://kotobank.jp/word/ 諸国風俗問状答 -1546143 （2022 年 1 月 6 日確認）

石丸盛　1977『下塩の民俗』、萩野書房

亀井千歩子　1996『日本のお菓子 ●祈りと感謝と厄除けと』、東京書籍

上村政基　2007『節季市のチンコロとトットッコ：雪国十日町の聞き語り』、上村政基

河本正義　校訂・覆刻　1934『諸国風俗問状越後国長岡領答書』、土俗趣味社

金塚友之亟　1936「刈羽山村の正月」『越志路』第 2 巻第 9 号、p.25-31、越志社

郷土博物館　1935「いんの子朔といんの子団子」『高志路』第 1 巻第 9 号、p.35・36、新潟県民俗学会

小林存　1935『越後方言考』、佐藤今朝夫（1975 復刊、図書刊行会）

小林存　1951『越後方言七十五年』、高志社

小泉蒼軒　1949『北越月令』、小泉蒼軒

国学院大学文学会民俗学研究会　1956「新潟県中頸城郡吉川町源」『３１年度民俗採訪』、p.1-72

近藤勘二郎　編　1937『三島郡史』、三島郡教育會

越路町史編集委員会民俗部会　1997『聞き書き　わたしたちの暮らし –越路町の民俗—』越路町史双書 No.4、越路町

丸田亀太郎　編　1931「風俗習慣」『長岡市史』、p.863-915、長岡市役所

松之山町史編さん委員会　1991『松之山町史』、松之山町

民俗学研究所　編　1960a「イヌノコツイタチ」『改訂　綜合日本民俗語彙』第 1 巻、p.110、平凡社

民俗学研究所　編　1960b「エンノコツイタチ」『改訂　綜合日本民俗

語彙』第 1 巻、p.195、平凡社
溝口政子　2010「越後長岡城下年中行事　二月　狗の子朔日」、http://dolcevitadefelice.blogspot.com/2010/03/blog-post_4758.html（2021 年 12 月 28 日確認）
溝口政子　2012a「八朔の馬、二月の犬」『新潟日報』2012 年 8 月 31 日夕刊
溝口政子　2012b「涅槃団子を食べる」」『越後＊菓子＊民俗』、http://dolcevitadefelice.blogspot.com/2012/02/blog-post_24.html（2021 年 12 月 28 日確認）
溝口政子　2014a「インノコ朔日」『＊ブレ・リ＊　麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/02/blog-post.html　（2021 年 9 月 13 日確認）
溝口政子　2014b「長岡・雲出の香林寺の涅槃団子」『＊ブレ・リ＊　麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/02/blog-post_15.html（2021 年 9 月 13 日確認）
溝口政子　2014c「長岡・寛益寺の涅槃団子づくり」『＊ブレ・リ＊　麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/02/blog-post_13.html（2021 年 9 月 13 日確認）
溝口政子　2014d「長岡・香安寺の涅槃団子」『＊ブレ・リ＊　麦だったり、米だったり、私たちの食と祈りの民俗をつなぐもの。』、http://ble-riz.blogspot.com/2014/03/blog-post_12.html（2021 年 9 月 13 日確認）
溝口政子　2017a「ちんころと犬の子朔日」『新潟日報』2017 年 1 月 26 日朝刊、p.21
溝口政子　2017b「涅槃会の犬の子」『新潟日報』2017 年 2 月 16 日朝刊、p.17
溝口政子・中山圭子　2011『福を招くお守り菓子 ●北海道から沖縄まで』、講談社
水沢村史調査委員会　1970『水沢村史』、水沢村史刊行会
長岡民俗の会　編　1985『長岡市の民俗調査報告（一）』、長岡民俗の会
長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会　編　1989『聞き書き　長岡の民俗（1）』長岡市史双書 No.2、長岡市
長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会　編　1990a『聞き書き　長岡の民俗（2）』長岡市史双書 No.6、長岡市
長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会　編　1990b『聞き書き　長岡の民俗（3）』長岡市史双書 No.12、長岡市
長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会　編　1990c『聞き書き　長岡の民俗（4）』長岡市史双書 No.13、長岡市
長岡市史編集委員会・民俗・文化財部会　編　1990d『聞き書き　長岡の民俗（5）』長岡市史双書 No.14、長岡市
長岡市　編　1992『長岡市史別編　民俗』、長岡市
長岡市立中央図書館文書資料室　編　2005『長岡城之面影 - 長岡城下年中行事 -』長岡市史双書 No.44、長岡市
長岡市立中央図書館文書資料室　編　2017『近代長岡の雑誌（2）『温古の栞』と大平与文次・温故談話会』長岡市史双書 No.56、長岡市
新潟県教育委員会　編　1965『新潟県の民俗』
新潟県民俗学会　編　1989「儀礼伝承」『図説日本民俗史 新潟』、p.162-166、佐藤文夫
西角井正慶　編　1958『年中行事辞典』、東京堂
小国町史編集委員会　編　1976『小国町史』、小国町
大竹信雄　1988「長岡領深沢村高頭家「諸事覚書帳」について」『新潟県の民俗と歴史』、p.183-200、駒形懸先生退職記念事業の会
中山太郎　1934「犬と民俗（完）」『読売新聞』1 月 11 日号朝刊、p.9
中山太郎　編著　1942「越後長岡領風俗問状答」『校註 諸国風俗問状答』、p.259-316、東洋堂
大平與文次　編　1895「一部落の風俗習慣」『越後風俗志』第 3 集、p.24-85、温古談話會
土田隆夫・武田広昭・真水淳　校注・著　1980「天保十年　農家年中行事記　大平與兵衛　著」『日本農書全集』25、p.258-293、農山漁村文化協会
三条市史編修委員会　1982『三条市史　資料編八　民俗』、新潟県三条市
鈴木昭英　1990「秋山景山自筆の「諸国風俗問状越後国長岡領答書」」『長岡市立科学博物館研究報告』第 25 号、p.61-78
鈴木昭英　1991「小泉蒼軒筆写の「諸国風俗問状越後國長岡領答書」」『長岡市立科学博物館研究報告』第 26 号、p.84-102
田中宣一　1962「インノコト」『日本民俗学会報』第 23 号、p.11-15、日本民俗学会
田中宣一　1992『年中行事の研究』、桜楓社
寺泊町　1988『寺泊町史』、寺泊町
鶴巻武則　1989「儀礼伝承」『図説日本民俗史 新潟』、p.162-166、岩崎美術社
上田村郷土誌編集委員会　編　1976『上田村郷土誌』、塩沢町教育委員会
山口賢俊　1967「チンコロ」『高志路』第 212 号、p.53、新潟県民俗学会
山口賢俊　1972『日本の民俗　新潟』、p.239・240、第一法規出版
山口賢俊・佐藤和彦　1982『生きている民俗探訪　新潟』、第一法規出版
柳田國男　1939『歳時習俗語彙』、民間伝承の会
柳田國男　1977「歳時小記」『年中行事覚書』講談社学術文庫、p.68-86、講談社
柳田國男　1999「土穂団子の問題」『柳田國男全集』第 20 巻、p.47-57、筑摩書房
横山旭三郎　1980「犬（戌）子朔日」『高志路』第 255 号、p.9-14、新潟県民俗学会

ミュージアム・マネジメントの実践（１）
－新十日町市博物館の取り組み－

Practice of the museum management: Approach of the new Tokamachi City Museum.

石原　正敏 [1]

ISHIHARA Masatoshi

新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）は、令和２（2020）年６月１日に開館した。新博物館の基本理念は、「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」である。十日町市の多様で豊かな自然と歴史・文化について、市民・来館者と共に探求し、保全・継承し、その価値を国内外に発信することをビジョンとしている。新博物館は、生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有している。展示は実物資料を中心とし、映像、音声、模型、参加体験型展示などの手法も取り入れ、誰もが親しめるわかりやすい展示となるように工夫している。また、解説文、音声ガイド、タッチパネルなどの多言語化（日本語・英語）にも取り組んでいる。

本稿では、旧博物館における 40 年の活動の歩みを振り返り、耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設へと方向転換した経緯について紹介する。また、新博物館の展示の特徴、開館後およそ１年半の運営にあたって、留意したことなどについてふれる。新型コロナウィルス感染症対策のほか、教育普及・展示事業、資料収集・調査研究・保存対策事業、資料燻蒸・移動作業など、事業の概要を紹介する。博物館には、いわゆる「表の顔と裏の顔」がある。資料の収集、整理、保管（修造）、調査、研究という仕事は裏の顔であり、展示や教育普及などが表の顔である。新博物館においては、文化財課と博物館という２つの組織が、車の両輪のごとく日々の業務に取り組んでいる。その中で、友の会活動、広域連携や地域連携、文化資源の魅力増進の取り組みなどについて、概要を紹介する。博物館活動においては、「調査研究」、「情報発信と後悔」が喫緊の課題であり、文化財の保存と活用においても、多くの課題がある。それらを踏まえ、課題解決に向けた方向性や方法等について考察する。

１．はじめに

十日町市は、なだらかな美しい山なみにかこまれ、悠々と流れてやまない大河・信濃川の両岸に河岸段丘が広がる十日町盆地の中心に位置している。南部には日本三大峡谷に数えられる清津峡があり、西部には日本三大薬湯のひとつ松之山温泉がある。この悠久の大地に住み継いだ先人たちは、自然からの恵みを活かして雪国の文化を育み、豪雪や洪水などの困難を乗り越え、美しい機を織り出しながら、今日に至る長い歴史を紡いできた。越後アンギンや近世越後を代表する産物の麻織物、越後縮の主産地であるなど、豊かな自然と文化に恵まれた歴史の古いまちである。

十日町市博物館は、1979 年（昭和 54）年の開館以来、「妻有地方の自然と文化」をテーマに、基本理念に掲げた「市民生活に密着した実物教育機関として、いつでも誰でも見たり、調べたりできる、市民のための博物館」を目指して様々な活動を展開してきた。その中で、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料 2,098 点」（昭和 61 年指定）、同「十日町の積雪期用具 3,868 点」（平成３年指定）、火焔型・王冠型土器群をはじめとする国宝「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器 57 点（附 871 点）」（平成 11 年指定）などが生み出されている。そして、平成 26（2014）年から準備を始め、開館 41 年目

1　十日町市博物館　〒 948-0072　新潟県十日町市西本町一丁目 448 番地９

となる令和２（2020）年６月１日に新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）がオープンした。旧博物館における 40 年の活動の歩みを振り返り、耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設への方向転換、新博物館の展示の特徴、開館後およそ１年半の運営にあたって留意したことなどについて紹介する。合わせて、雪文化三館提携や信濃川火焔街道連携協議会など広域連携や地域連携の取り組み、文化資源の魅力増進の取り組みなどについて紹介するとともに、課題と課題解決に向けた取り組み等について考察することを本稿の目的とする。

2. 博物館の沿革

十日町市博物館の沿革は、以下の通りである。

昭和 51（1976）年 文化財収蔵庫竣工
昭和 53（1978）年 旧博物館竣工
昭和 54（1979）年 博物館友の会設立（4/14）、旧博物館オープン（4/27）
昭和 60（1985）年 十日町市史編さん室設置（平成９年度まで）
昭和 61（1986）年「越後縮の紡織用具及び関連資料 2,098 点」が重要有形民俗文化財指定
平成３（1991）年「十日町の積雪期用具 3,868 点」が重要有形民俗文化財指定（4/19）、考古展示室オープン（5/7、２階の中世展示室は 7/6）
平成４（1992）年「笹山遺跡出土品 928 点」が国重要文化財指定（6/22）「雪文化三館」提携調印（11/21）
平成６（1994）年 旧博物館・常設展示室がリニューアルオープン（10/8）
平成 10 年（1998）旧博物館・考古展示室の一部改装
平成 11 年（1999）「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器 57 点（附 871 点）」が国宝指定（6/7）、梅原猛氏が名誉館長に就任（平成 21 年度まで）、開館・友の会設立 20 周年及び友の会新潟県教育委員会表彰受賞記念式典を開催（11/23）
平成 13 年（2001）国宝・火焔型土器№１の愛称「縄文雪炎」、マスコットキャラクター「ほのおまる」誕生
平成 16 年（2004）中越大震災発生（国宝が一部破損）
平成 17 年（2005）新十日町市誕生（周辺町村と新設合併）
平成 22 年（2010）国宝・火焔型土器№６が「日本の美 5000 年展」（トルコ イスタンブール）へ出品
平成 26 年（2014）「新十日町市博物館基本構想（案）」策定
平成 27 年（2015）「新十日町市博物館基本計画」策定
平成 28 年（2016）新館基本・実施設計に着手
平成 29 年（2017）実施設計の終了、新館建設工事に着手、国宝・火焔型土器№１が「国宝展」（京都国立博物館）へ出品
平成 30 年（2018）国宝・火焔型土器№６が「縄文ー一万年の美の鼓動ー」展（東京国立博物館）へ出品、国宝・火焔型・王冠型土器（№５・16）がジャポニスム 2018「深みへ展」（フランス パリ、チャイルド館）へ出品国宝・火焔型土器№１がジャポニスム 2018「縄文展」（フランス パリ、日本文化会館）へ出品
平成 31・令和元年（2019）新博物館本体建物の竣工（３月）、展示工事に着手（４月）、外構工事の竣工（７月）
令和２年（2020）展示工事の竣工（３月）、新博物館オープン（６月）

3. 耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設へ

（1）経緯

旧博物館を耐震化・改修し展示リニューアルを行うために、平成 22（2010）年度に「十日町市博物館展示替え構想検討会」（委員５名）が３回開催され、「博物館としてのテーマ設定について」、「新博物館の特色について」、「資料収蔵と展示スペースについて」、「博物館の具体的展示に向けた検討」、「雪に関した展示事例」の５項目について提言が行われた。その後、平成 24（2012）年度までに耐震診断、改修基本計画の検討などが行われた。

平成 25（2013）年９月２日、信濃川火焔街道連携協議会の第 12 回縄文サミット（総会）が開催され、構成市町の新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町の首長が揃った席上で、協議会顧問の小林達雄氏（國學院大學名誉教授）から「もうすぐ 2020 年のオリンピック・パラリンピック開催地が決定する。開催地が東京に決まったら、聖火台のデザインに火焔型土器を採用してもらうとよいのではないか」という発言があり、５市町の首長はこぞって賛同の意を示した。そして、９月８日、IOC 総会で 2020 年のオリンピック・パラリンピック開催地が東京に決定した。これを契機に、博物館リニューアル事業に新たな風が吹くことになった。まず、９月 21 日、下村博文文部科学大臣が十日町市を訪問し、新しく開校したふれあいの丘支援学校や博物館、国宝出土地・笹山遺跡などを視察した。この機会をとらえ、関口市長が「2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台デザインに国宝・火焔型土器を採用するよう」要望書を手渡した。さらに、12 月 19 日には、関口市長が文部科学省を訪問し、下村大臣に国宝・火焔型土器のレプリカを贈呈した。このレプリカは、文部科学省旧館２階にある「情報ひろば」に、その日のうちに展示された。その後、「火焔型土器を聖火台に」の運動をＰＲするために、この運動のメッセージを入れた十日町市観光協会の名刺２種類の作成や、市内４か所に懸垂幕を掲出するなどの事業を展開した。

平成 26（2014）年７月 10 日、信濃川火焔街道連携協議会第 13 回縄文サミットにおいて、「火焔型土器を 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に」のアピール宣言がなされた。また、首長の意見交換の中で火焔型土器を聖火台のデザインに採用してもらうのみでなく、オリンピックを契機に日本文化の源流である「縄文文化」を世界に発信することとし、協議会の５市町を核として、県外の市町村との連携も視野に入れながら活動を展開していくことが確認された。

新たな風が吹いたことを受け、平成 25（2013）年度中に耐震改修・展示リニューアルの場合と、新館建設の場合の費用対効果について協議が行われた。その結果、耐震改修・展示リニューアル工事の場合、①約２年間の休館が必要となる、②増築工事をした建物のため、見学者の導線をうまく設定できない、③ジオラマは現在のままという計画であるため、リニューアル効果があまり期待できない、という課題が確認された。さらに、新館建設でないと縄文文化を前面に出した展示を行なうのは難しいとの結論に至り、新館建設について検討を進めることになった。平成 26（2014）年 10 月末には、博物館職員で検討を重ねた新博物館の基本構想の素案が取りまとめられ、庁議による検討の結果、建設スケジュールを１年前倒しして、平成 31（2018）年度のオープンを目指すことになった。

（2）新博物館の展示の特徴

新博物館は、「国宝・火焔型土器のふるさとー雪と織物と信濃川ー」をテーマに、導入展示室「十日町プロローグ」、テーマ展示室Ⅰ「縄文時代と火焔型土器のクニ」、テーマ展示室Ⅱ「織物の歴史」、テーマ展示室Ⅲ「雪と信濃川」の４つの展示室で構成されている。実物資料の展示と合わせ、各種グラフィックやコンピュータを使用し、解説パネルや映像資料等で文化資源について、解説・紹介を行っている。常設展示の主な展示項目に対して日本語・英語切り替え式の音声ガイドを 25 台備えている。「エントランスホール」では、ホワイト地形模型へのプロジェクションマッピングの手法を用いて、地域全体を俯瞰した地形、自然、風土、歴史文化を７つのストーリーと英語対応の動画と合わせて見ることができる。十日町市全体の歴史文化や観光情報を２か国語対応で検索できるタッチパネルを備えている。「導入展示室」では、各展示テーマのイメージ映像を大画面に映し出すとともに、人感センサーにより壁面に各テーマの導入情報が表示され、入館者に興味を持たせる展示となっている。「縄文時代と火焔型土器のクニ」の展示室では、国宝「笹山遺跡出土深鉢形土器」のほか、県・市指定文化財など多くの館所蔵コレクションを展示している。触れることのできる国宝の高精細レプリカや火焔型土器の立体パズルなど体験型資料についても展示している。来館者が自由に選択した縄文人の衣服と自分の顔を合成したアバターが、狩猟や土器づくりなど縄文時代の生活をバーチャルに体験できる。東京国立博物館と共同研究で国宝・火焔型土器の CT 画像の連続動画により、表面では見ることのできない土器の製作方法を確認できる。また、市内 300 箇所以上の縄文遺跡を時代別に検索できる大型タッチパネルにより、遺跡や遺物の写真も含めて２か国語で検索できるようになっている。「織物の歴史」の展示室では、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」を中心に展示し、古代から現代までの織物の生産工程や歴史などを通史的に理解することができる。各自が選択した織物のデザインと経糸と緯糸の色の組み合わせを選択することで、先染めの生産工程と着物に仕立てたオリジナルの絵柄をコンピュータグラフィックスで体験できる。また、現在見ることができない越後縮の生産工程を２か国語対応の解説と写真で見ることができる。「雪と信濃川」の展示室では、重要有形民俗文化財「十日町の積雪期用具」を中心に展示し、十日町市の歴史文化の舞台となる雪や信濃川について知ることができる。旧博物館にあった移築民家（十日町市中条菅沼から移築）を再移築した民家内に多くの民俗資料を展示している。雪の重さを体験できるコーナーや昔の雪国の生活シーンを復元した縮小模型、豪雪を写した大型写真などを展示している。信濃川や渋海川の成り立ちや利用状況などを大型グラフィックパネルにより４人まで英語対応の動画を見ることができる。移築民家内のディスプレイには、現在では見ることのできない冬の状況や民話・昔話などを英語の動画で見ることができる。

4. 新博物館の運営

（1）職員体制、予算と来館者の状況

新博物館の令和２年（2020）度の職員体制は、正職員 12 名、会計年度任用職員４名でスタートした。正職員は博物館４名、文化財課８名（課長、課長補佐を含む）であり、互いに兼務する形となっている。会計年度

任用職員は、全て博物館の所属である。博物館には業務係、文化財課には文化財保護係、埋蔵文化財係の２係がある。土曜、日曜、祝休日については、正職員も当番勤務のローテーションに組み込まれる。年度途中異動のため、文化財課の正職員が１名減となった。新博物館の令和２（2020）年度の決算額は約 44,000 千円であるが、施設維持管理にかかる経費は約 19,000 千円である（会計年度任用職員の人件費を含み、正職員の人件費を除く）。令和２年度の入館者は、25,936 名であった（十日町市博物館編 2021b）。入館者の内訳は一般（有料）17,170 名、一般（免除）3,982 名、中学生以下 4,784 名であった。学校等団体は保育園６園、小学校 28 校、中学校 17 校、高校・専門学校・大学８校、子ども関連団体３団体であり、視察・見学等は 107 団体であった。

令和３（2021）年度は正職員 11 名、会計年度任用職員４名の体制でスタートした。年度初めに決めた職務分掌にそって事業を進めたが、事業の進捗状況や業務量を勘案して適宜見直しを行った。令和３（2020）年度の予算額は約 64,000 千円であるが、施設維持管理に係る経費は約 34,000 千円である（会計年度任用職員の人件費、物品販売仕入れ料を含み、正職員の人件費を除く）。令和３年度の入館者は、20,254 名である（令和３年 12 月末日現在）。市内の小・中学校等に授業等での博物館利用の呼びかけをするとともに、新潟県博物館協議会の運営研究会（７月）、新潟県歴史資料保存活用連絡協議会の歴史資料保存活用研修会（11 月）などの受入れにも取り組んでいる。

（2）新型コロナウイルス感染症対策

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和２（2020）年度は、以下の対応を行った。

①入館等の制限

５月 30 日　新館オープン記念セレモニー中止
６月１日　新館オープン、新潟県民限定･団体利用休止･同時入館制限を 100 人程度に制限
６月 19 日～　５都道県（北海道・東京都・千葉県・神奈川県・埼玉県）以外に居住する来訪者の入館制限解除
７月１日～　居住地域による入館制限解除
８月１日～　団体利用の制限緩和（40 人程度の１組に限定して受入れ）
９月 26 日～ 11 月８日　秋季特別展の企画展示室同時入室を 20 人に制限

②感染症対策

・非接触型体温計による入館時の検温
・風邪症状のある方及び 37.0℃以上の発熱者入館制限
・入館時のマスク着用徹底
・館内の３蜜回避の呼びかけ
・入口及びトイレ出口付近に手指消毒液の配置
・ポリエチレン製使い捨て手袋の配布
・ゴミ箱の撤去（ゴミの持ち帰り推奨）
・１日２回の巡回消毒の実施
・閉館後の体験型展示消毒の実施
・音声ガイド端末のフィルムラッピング（イヤホン貸出中止）
・受付に飛沫防止シールドを設置
・空調システムの外気導入最大化

令和３（2021）年度は、上記の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に留意しながら、臨時休館等をすることなく開館した。緊急事態宣言、まん延防止等重点措置、新潟県独自の特別警報などが発令されている期間においても、団体利用の制限は行ったものの、地域を限定した入館制限等は行わなかった。11 月中旬より、受付での使い捨て手袋の配布を休止している。

5. 事業の概要

（1）教育普及・展示事業

①教育普及事業

教育普及事業としては、博物館講座、古文書入門講座、子ども博物館の３つがある。

博物館講座は市民を対象としたもので、毎年６月頃に行っている。令和２年度は、縄文をテーマとして８月の土曜日（午後）に全３回シリーズで開催の予定であったが、首都圏における新型コロナウイルス感染症の再拡大を受け、急遽中止とした。令和３年８月に延期して実施した。

古文書入門講座は、古文書解読の初心者を対象としたもので、市内の史料をテキストにして古文書に親しむとともに、郷土の歴史を学ぶことを目的としている。令和２年度は、「御検地水帳」、「五人組帳」、「庚申夜話見聞録」、「峠道造直奉加帳」などをテキストとしている。７月から令和３年３月の土曜日（隔週・午前）に開催し、回

数は全 15 回である。受講生は計 10 人、内２人が新規の申し込み、その他は前年度からの継続であった。受講生よりテキスト代（2,000 円）を徴収している。令和３年度は６月より開講し、令和４年３月まで全 17 回の開催を予定している。

子ども博物館は、市内の小学４～６年生対象の体験教室である。令和２年度は、「鶏頭冠突起作り」（8/1）、「縄文クッキーを作ってみよう」（12/12）を実施した。各回とも定員 10 名（事前申込）、参加費（500 円・材料費）を徴収している。参加者は計 14 人であった。新型コロナウイルス感染症対策のため、保護者の参加は不可とした。鶏頭冠突起作りでは、オーブン陶土を使用している。令和３年度は、「土器拓本しおり作り」（8/22）、「土器片消しゴムづくり」（12/18）を実施した。

②展示事業

展示事業としては、企画展、特別展、特設展示のほか、まちの文化歴史コーナー HAKKAKE の展示事業がある。令和２年度は、新館オープン記念・夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」（6/1 ～ 8/23、日本博参画事業）、新館オープン記念・秋季特別展「縄文の遺産－雪降る縄文と星降る縄文の競演－」（9/26 ～ 11/8、日本博参画事業）、特設展示「昔の道具」（12/19 ～ 1/24）、冬季企画展「マジョリカお召と黒絵羽織」（2/13 ～ 3/28）などを開催した。

夏季企画展「国宝･笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」は、新博物館のオープンを記念して開催した。会期は 84 日間、観覧者数は計 9,645 人である。常設展示室と企画展示室の２会場とし、企画展示室では会期を前期（～ 7/12）と後期（7/14 ～）に分け、途中で土器の入れ替えを行った。常設展示室で計９点（深鉢８点、浅鉢１点）、企画展示室では計 53 点（前期：深鉢 24 点・浅鉢２点、後期：深鉢 25 点・浅鉢２点）を展示した。土器の入れ替えを行ったが、国宝指定の土器全ての展示は、平成 16（2004）年の中越大震災以降、初めての機会であった。

秋季特別展「縄文の遺産－雪降る縄文と星降る縄文の競演－」は、会期 44 日間、観覧者数は計 6,097 人である。新潟県と長野・山梨県では、それぞれ縄文をテーマとしたストーリー「なんだ、コレは！信濃川流域の火焔型土器と雪国の文化」と、「星降る中部高地の縄文世界－数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅－」が日本遺産の認定を受けている。本展では、これら３県から出土している土器、土製品、石製品などの優品（国宝・重要文化財を含む）を集め、中部高地に華開いた独自の文化を紹介した。国宝「縄文のビーナス」実物の新潟県内での公開は、今回が初めてであった。10 月 17 日（土）の午後には記念講演会を開催した。ミュージアムショップでは特設コーナーを設置し、展示品に関連したグッズを販売した。

冬季企画展「マジョリカお召と黒絵羽織」は、博物館友の会との共催で開催した。会期は 44 日間、観覧者数は 2,973 人である。昭和 34（1959）年に彗星のごとく登場したマジョリカお召と、その後、ＰＴＡルックと呼ばれて一世を風靡した黒絵羽織、昭和 30 年代後半から昭和 50 年代にかけて大ヒット商品となった２つの十日町織物について、館蔵資料を中心に紹介した。本展では、博物館友の会・きもの研究グループによる調査成果を活用し、展示の準備にもグループから協力を受けている。同グループは平成 25（2013）年に発足し、博物館収蔵の着物資料の整理を手伝うかたわら、銘仙、マジョリカお召、黒絵羽織など十日町織物の伝統と洗練された技術を後世に永く伝えるべく、活動を続けている。本展は、新博物館の基本理念「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」を体現するものとなった。

令和３年度は、新館オープン１周年記念・夏季特別展「形をうつす－文化財資料の新たな活用－」（6/1 ～ 7/4）、夏季企画展「形の移り変わり－縄文から現代まで」（7/22 ～ 8/29）、新館オープン１周年記念・秋季特別展「岡本太郎が見て、撮った縄文」（10/2 ～ 11/14）などを開催した。また、新館オープン１周年記念事業の一つとして、愛称募集を行い、「TOPPAKU」に決定した。今後、特設展示「昔の道具」（1/4 ～ 2/6）、冬季企画展「明石ちぢみと十日町小唄」（2/19 ～ 3/27）を開催予定である。秋季特別展では、ミュージアムショップに特設コーナーを設置し、展示品に関連したグッズを販売した。冬季企画展では、博物館友の会・きもの研究グループによる調査成果を活用し、展示準備や期間中の展示説明等にもグループから協力を受ける予定である。

（2）資料収集・調査研究・保存対策事業

①資料の収集

新博物館では市民等から十日町市に関係する民具・古文書・写真等の資料の寄贈を受付けており、令和２（2020）年度の寄贈は 36 件であった。スッポン、コス

キ、ロウソクタテ、ゼンマイ採り用着物、道仕切りの木札、原町五旒旗、松代地域の民話音声資料（カセットテープ）などの民俗・民具資料、黒絵羽織、紅型・小紋等の型染め資料、マジョリカお召・見本帳などの着物資料、文化財・市内風景・祭りなどのポジフィルム及びプリントなど写真資料、飯山線開設関係文書・古文書・古典籍などの歴史資料、十日町小唄水墨画（中山晋平書・水谷八重子画）及び掛軸類など美術資料、十日町森林総合研究所観測記録及び中里養魚センター観測記録などの記録資料である。

令和３(2021)年度の寄贈は 100 件を超えている(12 月末日現在)。中尾神楽上演用具一式、昔の写真、雪まつり関係ほか写真データ・ポジ、十日町産地の着物（黒羽織・着物コート・お召縮緬ほか)、蓄音機、清水村庄屋家文書一括、太子講掛軸（明屋有照画賛)、スカリ等民具などである。

②資料燻蒸・移動作業

新博物館オープン準備のため、令和元（2019）年 12 月２日をもって旧博物館を休館とした。11 月下旬に新博物館・展示室に展示する資料の燻蒸作業を新博物館トラックヤードで行った。12 月上旬に事務室の機能を新博物館に移し、その後、国宝「笹山遺跡出土品」を新博物館・考古収蔵庫に移動した。令和２（2020）年１月中旬には、燻蒸済の着物資料を新博物館・着物収蔵庫へ、続く２月上旬に重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」のうち、燻蒸済の指定品を新博物館・民俗収蔵庫へ移動した。旧博物館の収蔵庫に収納されている、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」と「十日町の積雪期用具」を新博物館の民俗収蔵庫に移動するため、令和２（2020）年７月と 12 月に燻蒸作業を行った。作業は専門業者に委託している。７月は旧博物館２階の収蔵庫、12 月には旧博物館１階の展示室を使用して包み込み（幅３ｍ×奥行４ｍ×高２ｍ）による燻蒸を行った。また、７月には市指定文化財「群馬図屏風 雲谷等顔筆 六曲一双」（十日町市所蔵)も合わせて燻蒸している。同屏風については、これまで旧松之山小学校（現まつのやま学園）で、管理・保管していたが、劣化が著しく、保存環境に適した場所での保管が必要であるため、燻蒸後は新博物館の収蔵庫に収納することとした。

令和３（2021）年度は、10 月に燻蒸作業を行い、燻蒸後は新博物館の収蔵庫に移動した。

(3) 博物館友の会

これまで博物館の様々な活動を支えてくれたのは、館への理解・協力、支援団体でもある友の会である。昭和 54（1979）年の友の会設立趣意書には博物館竣工のお祝いとともに、「これからは市民全体で、この施設を文化の殿堂に育てていかなければならないと考えます」と謳われている。文字通り、開館以来、博物館は友の会によって育てられ、博物館と友の会が一体となって地域文化の振興に努めてきたといっても過言ではない。

思い返せば、昭和 59（1984）年の開館・友の会設立５周年記念シンポジウム「妻有の文化を考える」(4/28）をはじめ、平成元（1989）年の開館・友の会設立 10 周年記念特別展「池田満寿夫」展（10/21 ～ 10/29)、平成６（1994）年の開館・友の会設立 15 周年記念特別展「棟方志功」展（10/8 ～ 10/23)、平成 11（1999）年の「開館・友の会設立 20 周年及び友の会新潟県教育委員会表彰受賞記念式典、講演会「日本人らしく生きる」（講師：新潟県博物館協議会会長・伊藤文吉先生)」、平成 16（2004）年の開館・友の会設立 25 周年記念式典、野外パーティ、郷土記録賞表彰式」(9/28)、平成 21（2009）年の「博物館開館・友の会設立 30 周年記念式典、桂歌助落語会」(10/18)、平成 26（2014）年の「博物館開館・友の会設立 35 周年／笹山遺跡出土品国宝指定 15 周年記念講演会「イタリアの考古学･日本の考古学」（文化庁長官･青柳正規先生)」、「博物館開館・友の会設立 35 周年記念講演会「地域博物館の可能性」（講師：東京都美術館学芸員・佐々木秀彦先生)」、令和元（2019）年の「博物館開館・友の会設立 40 周年／笹山遺跡出土品国宝指定 20 周年記念講演会「最新の研究からわかった縄文時代」（講師：国立歴史民俗博物館教授・山田康弘先生)」(8/31）などの周年行事はもとより、昭和 61（1986）年の「郷土植物園開園式」(11/17)、昭和 63（1988）年の「遺跡ひろば開場式」(5/22)、平成３（1991）年の考古展示室全室オープン記念鼎談「雪はどのような文化をもたらしたか」(7/6)、平成４（1992）年の笹山遺跡出土品・国重要文化財指定記念講演「縄文芸術にせまる」（講師：金沢美術工芸大学教授･小島俊彰先生)、平成６（1994）年の「越後あんぎんシンポジウム」(11/12)、平成８（1996）年の「火焔フォーラムと縄文の夕べ」(10/12 ～ 10/13)、平成 11（1999）年の笹山遺跡出土品「国

宝指定記念式典、同講演会「越後・新潟・火焔型土器のクニ」（講師：國學院大學教授・小林達雄先生）」（7/3）、令和元（2019）年の「笹山遺跡出土品国宝指定 20 周年記念シンポジウム」（11/9）など、一体となって取り組んだ事業は枚挙にいとまがない（十日町市博物館・十日町市博物館友の会 1999、同 2009 ほか）。

博物館友の会は令和３（2021）年度で 42 年目を迎えた。会員は同年 12 月末現在で約 600 名である。植物・古文書・いしぶみ・歴史・方言・考古・きもの・民俗・近代史（世界遺産を学ぶ会）の９つの研究グループが、研究活動を行っている。令和２（2020）年度は総会（4 月）、文化財めぐり（6 月）、庚申供養祭（7 月）、雪まつり・はくぶつかん広場（2 月）、令和３（2021）年度は総会（4 月）、文化財めぐり（6 月）などが新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった。

①令和２（2020）年度の活動

『火焔』137 号発行（6/27）、研究グループ代表との懇談会（8/21）、『火焔』138 号発行（9/12）、第 90 回文化財めぐり「群馬の新名所を訪ねる旅－完成した八ッ場ダム周辺見学・伊香保の新名所「法水寺」など－」（10/14）、３研究グループ（古文書・民俗・いしぶみ）合同研修会　講演会「上杉謙信と戦国時代の魚沼」（講師：愛知大学文学部　山田邦明先生）（12/5）、『火焔』139 号発行（2/13）、研究グループ発表会（3/13）

②令和３（2021）年度の活動

『火焔』140 号発行（5/15）、研究グループ活動中間報告会・庚申供養祭（7/10）、『火焔』141 号発行（9/11）、第 91 回文化財めぐり「北方文化博物館と新潟古町芸妓の舞」（10/14）、３研究グループ（古文書・民俗・いしぶみ）合同研修会　講演会「妻側からの離縁状・その後」（講師：新潟県立文書館　本田雄二先生）（12/11）

6. 広域連携や地域連携の取り組み

（1）雪文化三館提携

豪雪地として知られる魚沼地方で、雪を拠りどころにしながら独自の活動を展開する、十日町市博物館、トミオカホワイト美術館、鈴木牧之記念館の三館は、平成４（1992）年 11 月 21 日に姉妹館として雪文化三館提携を結んでいる。

「魚沼地方は、新潟県内でも屈指の積雪地帯であります。鈴木牧之が『北越雪譜』の中で、「雪ありて縮あり、されば越後縮は雪と人と気力相半ばして名産の名あり」と述べているように、この地方には、雪と人が織りなす雪国特有の文化が息づいています。これが、雪の文化です。

十日町市博物館、トミオカホワイト美術館、鈴木牧之記念館は、それぞれ、雪の文化を象徴するモノと芸術とヒトの枠を集めた雪国文化の殿堂であります。人々はこの、雪を拠りどころにしながら独自の活動を展開する三館を巡観することによって、文化に及ぼす雪の力、雪の美しさ、雪の文化の多様性、そして文化遺産のすばらしさ等を再認識し、雪への理解と愛着を一層深めるものと確信します。私たち三館は、ここに姉妹館の関係を締結し、互いに協力して、新しい雪の文化の創造発展に寄与していくことを宣言します」と三館提携宣言にある。

その歩みを簡単に振り返ってみる。平成４（1992）年 11 月に三館提携調印及び提携記念講演会（「私の雪国体験」、講師：遠藤八十一先生）が開催された。その後、共通リーフレット、ロードマップ、三館共通入館券の作成、共同広告掲載、三館ホームページ開設（2000 年～）などを行っている。リーフレットやスタンプラリー台紙等は改訂され、現在に至っている。平成６（1994）年には、三館関係者がトミオカホワイト美術館のミュージアムコンサートに参加している。平成７（1995）年からは三館関係者講話会が開始され、「博物館・美術館の入館者増をはかるには」（講師：原田健一先生）、平成８（1996）年は「トミオカ芸術の評価」（講師：長谷部昇先生）、平成９（1997）年には「雪の与えた生活文化」（講師：田中圭一先生）、平成 10（1998）年には「わがまち・わが人生」（講師：丸山秀二先生）、平成 11（1999）年には「トミオカホワイトについて」（講師：山本安雄先生）、平成 13（2001）年には「魚沼の文化と文化施設」（講師：梅田健次郎先生）、平成 15（2003）年には「博物館を学ぶ」（講師：青木豊先生）、平成 16（2004）年には「外国人のみた雪文化」（講師：国際大学学生３名）、平成 17（2005）年には「新十日町市の観光について～身近な資源を活かすために～」、講師：岩船眞人先生）などが行われた。

平成９（1997）年には提携５周年記念企画三館巡観バスツアー、平成 12（2000）年には大地の芸術祭「楽市楽座」参加、平成 14（2002）年には巡回展「北越雪譜と魚沼の風土」の開催、『北越雪譜と魚沼の風土』刊行、三館で講演会開催（講師：小林達雄先生（トミオ

カホワイト美術館)、髙橋実先生（鈴木牧之記念館)、市川健夫先生（十日町市博物館)）などの提携 10 周年記念事業、平成 19（2007）年には提携 15 周年記念写真展を三館で同時開催、提携 15 周年記念邦楽コンサート開催（トミオカホワイト美術館)、平成 20（2008）年には出張特別展（長岡市立中央図書館)、平成 22（2010）年には「真夏の火焔まつり」に三館共通ブース設置（8/21 ～ 8/22)、平成 29（2017）年には提携 25 周年記念特別展が三館で開催（9 ～ 11 月）された。互いに協力し、新しい雪文化の創造発展に寄与しようと始まったこの交流も令和４（2022）年に 30 周年を迎える。

(2) 信濃川火焔街道連携協議会

信濃川火焔街道連携協議会（以下、協議会）は、「火焔型土器」に代表される“縄文”をキーワードに、信濃川流域の市町村が交流・連携をはかり、地域振興や広域観光を推進することを目的として、平成 14（2002）年８月に設立された。現在、十日町市、新潟市、三条市、長岡市、魚沼市、津南町の５市１町で構成されている。協議会会長は２年ごとに交代する。令和２～３年度は十日町市が会長市、新潟市が副会長市である。事務局は現在、十日町市文化財課（博物館）内にある。加盟自治体は規約により市は 800 千円、町は 400 千円を負担する。協議会は年間 4,400 千円の負担金で運営され、交流促進事業、情報発信事業、アピール事業などに取り組んでいる。

協議会においては、平成 26（2014）年７月の第 13 回縄文サミットでのアピール宣言を契機として、「火焔型土器を 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に」という運動に取り組んできた。また、平成 28（2016）年４月には『「なんだ、コレは！」信濃川流域の火焔型土器と雪国の文化』というストーリーが日本遺産に認定された。日本遺産を通じた地域活性化計画における将来像について、「火焔型土器や火焔型土器を作った人々が残した遺跡、縄文時代の人々が見た景観、火焔型土器の文化的遺伝子が引き継がれた雪国の民具などと地域固有の魅力ある資源を有機的に結びつけ、構成文化財が所在する地域の連携強化をはかり、日本遺産を活用した地域振興や広域観光を民間活力の協力も得ながら推進し、国内外広域に発信し流動人口の増加、来訪者の滞在時間・満足度の向上に努め、活力のある持続可能な日本文化・雪国文化の個性ある地域を目指す」としている。将来像を実現するための取り組みとして、①火焔型土器・信濃川火焔街道の魅力を国内外に向けて発信する、②火焔型土器が醸し出す地域づくりを推進する、③信濃川火焔街道で人やモノの交流拡大と観光振興を推進する、④火焔型土器を研究することによってブランド力の強化を図る、⑤火焔型土器、縄文集落、縄文文化の理解促進を図る、⑥地域の史跡と博物館・資料館の連携促進を図り、魅力を向上させ、ファン層の拡大を図る、⑦外国からの旅行者に本物の縄文暮らしを体験してもらい、縄文の魅力を知ってもらう、という７つの柱を設定している。

協議会では、平成 28（2016）年度～平成 30（2018）年度の３年間に文化庁の日本遺産魅力発信推進事業の補助金をうけて、事業を行なった。

【平成 28（2016）年度】
・情報発信・人材育成事業
（ポスター、チラシ、パンフレット、多言語ＨＰ等作成、ＰＲプロモ―ション映像撮影、スマートフォンアプリ制作、日本遺産広告設置（ＪＲ長岡駅にフロア広告、フラッグ広告)）
・普及啓発事業
（日本遺産特別展の開催（國學院大學博物館)、日本遺産「国際縄文フォーラム火焔街道往来 2016」の開催（國學院大學)、特別展図録『火焔型土器のデザインと機能』作成、日本遺産学習会の支援、外国人向けモニターツアーの実施）
・公開活用のための整備に係る事業
（日本遺産サイン看板設置（新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町)）
【平成 29（2017）年度】
・情報発信・人材育成事業
（デジタルガイドブック作成、ＰＲ用日本遺産関連動画撮影、日本遺産認定ＰＲ広告の設置）
・普及啓発事業
（日本遺産特別展の開催（京都大学総合博物館)、日本遺産「縄文フォーラム」の開催（京都大学)、特別展図録『火焔型土器と西の縄文』作成、特別展や日本遺産などのＰＲ（羽田空港)）
・公開活用のための整備に関する事業
（日本遺産縄文土器モニュメント設置（新潟市、魚沼市、十日町市、津南町)、日本遺産サイン看板設置（魚沼市)）
【平成 30（2018）年度】
・普及啓発事業

（日本遺産縄文フェス開催事業、日本遺産観光ＰＲ出展事業、モニュメントスタンプラリー用スタンプ及び台紙の作成）
・調査研究事業
（縄文グッズ、商品開発検討事業）
・公開活用のための整備にかかる事業
（日本遺産縄文土器モニュメント設置（十日町市））

令和元（2019）年度～令和３年（2021）度の３年間について同補助金はうけていないが、同補助金の対象となった事業は、日本遺産を通じた地域活性化計画の指標となっていることから、やめることが難しい。交流促進事業とアピール事業は協議会の活動の生命線であるため、削減は難しいが、事業の統合や事業規模の見直し等により、事業効果をあげていく必要がある。事業効果についての検証を随時行いながら、令和４（2022）年度以降に向けて方向性を検討する必要がある。令和４（2022）年に協議会は設立 20 周年を迎える。

（3）笹山じょうもん市、大井田賞、縄文川柳大会等への支援・協力

①笹山じょうもん市

平成 11（1999）年６月７日、火焔型・王冠型土器群をはじめとする笹山遺跡出土品が国宝に指定された。国宝指定をうけて中条地区振興会では、国の宝を名実ともに中条地域と十日町市の宝とし、遺跡の保存活用策を地元から積極的、具体的に提案し、その実現を図るために振興会の専門部として笹山遺跡保存活用委員会が設立された。

委員会の事業部は国宝１周年記念「笹山縄文の集い」を開催し、地域の年中行事に育てようと提案した。記念行事は、国宝指定１周年の機会に地元の大勢の目を笹山に向け、笹山遺跡・国宝との距離を縮めるのに役立つような行事としたい。そのために、大人も子どももつれだって「笹山・縄文」で遊び、楽しんでもらえるようなものにするという基本的な考え方から計画され、平成 12（2000）年６月４日に第１回笹山じょうもん市が開催された。十日町市では、第２回から特別講師の招聘等にかかる経費等の一部を支援しており、現在の所管は文化財課（博物館）である。笹山じょうもん市は、令和４（2022）年６月で 23 回目を迎える。

②大井田賞

平成３（1991）年に「第１回大井田氏サミット」が開催され、サミットを契機に「全国大井田同族会」が結成された。サミットは、第２回が平成５（1993）年に、第３回が平成８（1996）年に、第４回が平成 15（2003）年に、第５回が平成 25（2013）年に開催されている。全国大井田同族会は、平成４年から毎年、十日町市内の小中学校に図書券を贈呈してきた。平成 15（2003）年の第４回サミットを契機に、全国大井田同族会との交流や連絡を図るために、大井田氏発祥の地とされる中条・大井田地区の関係団体の長を主体に「全国大井田氏交流連絡会」が組織された。事務局は、発足当初より十日町市博物館にある。「大井田賞」はスポーツや文化の活動並びにボランティア活動等において、顕著な活躍があった中条中学校の生徒に贈られる。大賞、優秀賞、奨励賞、特別賞の４つの賞があり、賞状と副賞が授与される。平成 19 年２月に「第１回大井田賞授賞式」が開催され、令和４（2022）年に第 16 回目を迎える。同事業に博物館（文化財課）が協力している。

③縄文川柳大会

平成 26（2014）年に、国宝指定 15 周年を記念して縄文川柳大会が企画された。中条地区振興会、中条飛渡地域協議会、ＮＰＯ笹山縄文の里、中条公民館、笹山縄文倶楽部が実行委員会を組織し、準備・運営にあたっている。第１回大会に 584 句の作品が集まり、作品は年々増えており、第８回は 1,000 句を超える作品が集まった。令和２（2020）年、令和３（2021）年は、新型コロナウイルス感染症対策のため、表彰式等は中止となったが、縄文川柳大会は令和４（2022）年秋で９回目を迎える。事業の後援手続き、関係機関への周知等に文化財課（博物館）が協力している。

7．文化資源の魅力増進の取り組み

（1）縄文文化発信事業

縄文文化発信事業の概要は下記のとおりである。

平成 27（2015）年度は、①縄文国宝サミット（仮称）の提案、②国宝・火焔型土器の大型写真看板作製、③縄文土器先生 DVD 制作、④ JR 大宮駅デジタルサイネージ掲載、などを実施した（十日町市博物館編 2016）。平成 28（2016）年度は、①リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック 2016 での「国宝・火焔型土器レプ

リカ」寄贈、②国宝・笹山遺跡深鉢形土器の 3 次元計測、などを実施した（十日町市博物館編 2017）。平成 29（2017）年度は、①「国宝応援プロジェクト」、②「あの頃青春グラフィティ」のエフエム公開生放送（9/30）、③国宝・火焔型土器の京都国立博物館「国宝」展への出品、④「ASOBO JAPAN」（10/27 ～ 10/28）、⑤「縄文女子ツアー」（11/11 ～ 11/12）、⑥「縄文 DOKI ★ DOKI ！土器作り体験プロジェクト」（1/20 ～ 1/21）、⑦国宝・火焔型土器（指定番号 1）の高精細レプリカ製作、などを実施した（十日町市博物館編 2018）。

平成 30（2018）年度は、①国宝・高精細レプリカ展示（5/3、きものまつり協賛）、②国宝・火焔型土器の東京国立博物館「縄文ー一万年の美の鼓動ー」（7/3 ～ 9/2）への出品、③第 2 回縄文国宝首長連携懇談会の開催（8/10、東京国立博物館平成館）、④ジャポニスム 2018：響きあう魂（全体開会式）、⑤国宝・火焔型土器のジャポニスム 2018「深みへー日本の美意識を求めてー」展（7/14 ～ 8/21）への出品、⑥国宝・火焔型土器のジャポニスム 2018「縄文ー日本における美の誕生ー」展（10/17 ～ 12/8）への出品、⑦文化庁の「高校生ニッポン文化大使 2018」に当市在住の高校生 2 名が任命、⑧ JR 大宮駅デジタルサイネージ掲載（10/1 ～ 10/31）、⑨国宝・王冠型土器の高精細レプリカ製作、などを実施した（十日町市博物館編 2019）。令和元（2019）年度は、①国宝・高精細レプリカ展示（5/3）、②国宝指定 20 周年記念講演会「縄文の美を捉える」（講師：東京国立博物館考古室長・品川欣也先生、6/1）、③「日本の美への誘い展」開催（日本博事業、8/8 ～ 9/20）、④国宝指定 20 周年／博物館開館・友の会設立 40 周年記念講演会「最新の研究からわかった縄文時代」（講師：国立歴史民俗博物館教授・山田康弘先生、8/31）、⑤ JR 大宮駅デジタルサイネージ（10/1 ～ 10/31）、⑥映画「縄文にはまる人々」上映会（10/9）、⑦国宝指定 20 周年記念シンポジウム「縄文の国宝」（11/9）、⑧縄文・里山文化による誘客促進事業（地方創生推進交付金事業）、などを実施した（十日町市博物館編 2020a）。令和 2（2020）年度は、①野首遺跡出土品が新潟県文化財に指定、②国宝・火焔型土器モニュメント活用、③国宝・火焔型土器を含む特殊切手「国宝シリーズ第 1 集（考古資料）」の販売、④新館オープン記念・夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」の開催、⑤新館オープン記念・秋季特別展「縄文の遺産ー雪降る縄文と星降る縄文の競演ー」の開催、⑥秋季特別展記念講演会「日本美術史における縄文的なもの」（講師：明治学院大学教授・山下裕二先生、10/17）の開催、⑦「十日町縄文ツアーズ・モニターツアー」の開催（11/4）、⑧「新館オープン記念フレーム切手」の発売（R3.2/16 ～）、などを実施した（十日町市博物館編 2021b）。

（2）とおかまちスノーカントリーミュージアム魅力増進事業

令和 2（2020）年 11 月に、文化観光推進法に基づく十日町市の地域計画が国の認定を受けた。文化観光推進法は、文化についての理解を深める機会を充実させることで国内外からの観光客の来訪を促進し、文化観光の振興や地域の活性化を図る目的で令和 2 年 5 月に施行されている。十日町市の地域計画では、令和 2 年度～ 6 年度の 5 年間にわたり、市内 5 つの文化観光拠点施設と市内に点在する文化資源を結びつけた事業を実施する。

新博物館では、令和 2 年度に①施設・設備の整備事業（入館券券売機のキャッシュレス化事業）、②文化資源の魅力増進事業（無形文化財資源データ映像化事業）、③文化資源の理解促進事業（博物館所蔵文化遺産体験事業）などを行った。

令和 3 年度は、①十日町市博物館所蔵文化遺産体験事業（土器風焼き物体験、雪国の遊び体験、ほんやらどう体験）、②博物館収蔵資料デジタルアーカイブ化事業（国宝・新潟県笹山遺跡土器（62 点）三次元計測業務委託）、③博物館多言語化対応事業（展示パネル（日本語・英語）に他言語を追加（QR コード対応））、④博物館収蔵文化財に関する人材育成事業（講習会の開催：アンギン編み、チンコロ作り、雪の民具、雪国の保存食）、⑤文化観光拠点施設連携企画展等開催事業（「博物館ーキョロロ」連携企画展（10/23 ～ 3/13）、「博物館ー情報館」連携企画展（第 13 回山内写真館資料写真展）（R4.3/10 ～ 3/22））、⑥文化財・地域資源を活用した商品開発事業（博物館所蔵の文化財を活用した商品開発、ワークショップ開催）の 6 つの事業を実施している。

8. 今後の課題

（1）博物館活動

新博物館は、かけがえのない地域の財産である「国宝・笹山遺跡火焔型土器群をはじめとした縄文文化」と

「古代にまで歴史がさかのぼる織物文化」、これらを生み出す原動力となった「雪と信濃川の恵みと文化」を守り継承して、その魅力を国内外に広く情報発信する施設である。新博物館の使命として①市民の知的関心に応えるため、資料や情報を収集・保管、調査・研究、展示・普及し、生涯学習の拠点としてその役割を果たす、②地域の歴史や文化に対する市民の理解を深め、より良い未来に向かって市民と共に新しい価値を創造する、③魅力ある財産として地域固有の歴史・生活文化・産業に光をあて、その活用を通した来館者との交流により地域振興に貢献する、④市民及び来館者と対話しながら共に成長し、博物館友の会、他の博物館・関係機関と連携して活動する、の４点があげられている。新博物館の機能として、「展示」、「教育普及」、「資料収集・保存」、「調査研究」、「情報発信・公開」、「施設の管理・運営」、「ホスピタリティ」の７項目があげられている（十日町市博物館編 2020b）。この中で、「調査研究」、「情報発信と公開」が喫緊の課題である。調査研究を継続的に行い、新たな事実や価値を博物館活動に反映していくことが重要である。また、誰もが調べることができる生涯学習の拠点として情報を発信し、収集した地域資料や図書、調査研究の成果であるデータベースなどの公開に向け、さらなる努力を重ねていく必要がある。

なお、参考資料として、旧博物館の入館者の推移を第１表～第２表に示した。旧博物館で開催された企画展・特別展を第３～第５表に、博物館講座を第６表～第９表に、まちの文化歴史コーナー HAKKAKE の展示を第 10 表に示した。今後の調査研究や教育普及活動の参考としていきたい。

（2）文化財の保存と活用の推進

第二次十日町市総合計画後期基本計画において、基本方針２「活気ある元気なまちづくり」の政策４「誰もが自由に楽しく学び多様な文化にふれあえるまち」として、「文化財の保存と活用の推進」をあげている。十日町市固有の歴史や文化を保存するとともに、国・県・市の指定・未指定に関わらず、その価値を幅広く捉え、文化財を積極的に活用する。また、十日町市博物館を拠点に文化観光の推進に取り組み、地域文化の魅力を国内外に発信して地域活性化を図ること、を施策の方針に掲げている。この中で、具体的な施策として、文化財の保存と活用については、①十日町市歴史文化基本構想に基づき、有形・無形の各種文化財の保存と活用を図り、広く情報発信し、「誰もが多様な文化にふれあえるまちづくり」を推進する、②日本遺産に認定された地域の文化・伝統ストーリーを国内外に発信し、地域の特色や歴史的魅力を伝えるなど、観光や産業分野とも連携しながら、文化観光の推進を図る、③文化財の総合的な保存と活用を図るため、文化財保存活用地域計画の策定を検討する、とある。本市の文化財に関する基本的・総括的なマスタープランである「十日町市歴史文化基本構想」を踏まえ、そのアクションプランとなる「十日町市文化財保存活用地域計画」を、令和４（2022）年度～令和５（2023）年度に策定するべく、検討中である。

文化財施設の整備と活用については、①十日町市博物館を歴史や文化にふれる文化観光の拠点として位置付けるとともに、縄文文化や日本遺産ストーリー関連施設の整備を行い、世界に向けてその魅力を発信する、②博物館の収蔵物などの文化財や、他館所蔵の国宝などの優良な文化財を活用した企画展を開催し、市民への教育普及活動を積極的に行う、③国宝出土地である笹山遺跡を中核に、国史跡「田沢・壬遺跡」や県指定「野首遺跡出土品」などの縄文遺跡の保存や活用を図る。また、「生きた歴史体感プログラム」など縄文時代を体験・体感できる、ソフトプログラムを充実させる、とある。また、文化財の調査・研究と活用については、①歴史資料・民俗資料などの資料収集、整理分析、研究を行うとともに、その成果を広く一般に公開し、活用を図る、②埋蔵文化財の発掘・整理・分析・研究を行い、調査報告書を順次刊行するとともに、その成果を広く一般に公開し、活用を図る、とある。新博物館の基本理念、ビジョン、使命、機能に沿うよう活動を活発に展開するとともに、文化財の保存と活用の計画的な推進を図っていく必要がある。

9. おわりに

地域博物館の大切な目的の一つは、地域の人々の“ふるさと確認”でもある郷土学習への契機であり、生涯学習の場の提供である。これは、次に地域交流へと続く地域おこしであり、地域文化の核を創出することに繋がる。市民とともにこうした運動に取り組み、地域に根ざした活動を推進することこそ、十日町市博物館と友の会の原点であり、使命であると考えている。

平成４（1992）年に重文・火焔型土器№１が「日本の古代展」（アメリカ ワシントン D.C.、アーサー・サッ

クラー美術館）へ出品された。その後、平成 10（1998）年には重文・火焔型土器№ 1 が「縄文展」（フランス パリ、日本文化会館）に、平成 13（2001）年には国宝・火焔型土器№ 1 が「古代日本の聖なる美術展」（イギリス ロンドン、大英博物館）に出品された。これら資料貸出は博物館の重要な機能の一つである。紙数に限りがあるため、実物資料、写真資料など資料の貸出、博物館実習、職場体験、火焔の都整備事業などを含め、稿を改めて検討の機会をもちたい。

この 35 年の間に、阿部恭平、阿部敬、井上信夫、今井哲哉、上野洋子、宇都宮正人、岡村和博、小熊博史、小野昭、貝瀬香、角山誠一、笠井洋祐、風間栄光、上村松雄、川村知行、木村英祐、久保禎子、小林隆幸、小林達雄、小林徳、斉木文夫、佐々木榮一、佐藤信之、佐藤雅一、眞田岳彦、佐野誠市、佐野芳隆、菅沼亘、竹内俊道、高木公輔、髙橋由美子、滝沢栄輔、田村シゲ、田村実義、立木宏明、角田由美子、富井敏、長津政勝、中村由克、新田康則、橋本博文、林真子、樋口信一、平野勝、平山育夫、廣野耕造、藤木悌次、星野元一、松村実、水落辰美、宮尾亨、村山久夫、山田正毅の各氏をはじめ、多くの方々よりご指導・ご教示をいただいた。また、故人となられたが、甘粕健、石澤寅義、今福利恵、大島伊一、岡田稔、上村政基、小島俊彰、小林宏行、佐野良吉、島田靖久、須藤重夫、滝沢秀一、田村達夫、冨澤孝之、中澤幸男、波形卯二、樋熊清治、廣田永二、藤本強、丸山克己の各氏から種々ご教示をいただいた。文末ではあるが記して厚くお礼申し上げる。

引用参考文献

石原正敏 2004「笹山遺跡」『縄文・弥生の遺産』安城市歴史博物館
石原正敏 2010「豪雪地帯に生まれた文化－火焔土器の世界－」『知っておきたい新潟県の歴史』新潟日報事業社
石原正敏 2015「「火焔型土器のクニ」から－笹山遺跡の土器、土製品や石器類」『東北学』05、はる書房
石原正敏 2018『国宝「火焔型土器」の世界　笹山遺跡』新泉社
佐野良吉 1990『妻有郷の歴史散歩』国書刊行会
佐野良吉 1982『随想妻有郷－十日町地方の歴史と民俗－』国書刊行会
十日町市博物館　編 1988『ガイドブック 十日町市の遺跡』
十日町市博物館　編 1994『図説 越後アンギン』
十日町市博物館　編 1996a『火焔土器研究の新視点』
十日町市博物館　編 1996b『縄文の美－火焔土器の系譜－』
十日町市博物館　編 2015『十日町市博物館 年報 第 1 号』
十日町市博物館　編 2016『十日町市博物館 年報 第 2 号』
十日町市博物館　編 2017『十日町市博物館 年報 第 3 号』
十日町市博物館　編 2018『十日町市博物館 年報 第 4 号』
十日町市博物館　編 2019『十日町市博物館 年報 第 5 号』
十日町市博物館　編 2020a『国宝 笹山遺跡出土品のすべて（改訂版）』
十日町市博物館　編 2020b『十日町市博物館 要覧』
十日町市博物館　編 2020c『十日町市博物館 年報 第 6 号』
十日町市博物館　編 2000d『火焔型土器をめぐる諸問題－笹山遺跡の謎に迫る－』
十日町市博物館　編 2021a『常設展示案内ガイド』
十日町市博物館　編 2021b『十日町市博物館 年報 第 7 号』
十日町市博物館・十日町市博物館友の会　編 1999『十日町市博物館開館・博物館友の会設立 20 周年記念誌　国宝のまち モノが語る 博物館』十日町市博物館・十日町市博物館友の会
十日町市博物館・十日町市博物館友の会　編 2009『十日町市博物館開館・博物館友の会設立 30 周年記念誌　モノが語る博物館』
十日町市教育委員会文化財課 2018『十日町市歴史文化基本構想』十日町市
十日町市博物館 , 鈴木牧之記念館 , トミオカホワイト美術館　編 2002『雪文化三館提携 10 周年記念企画　北越雪譜と魚沼の風土』十日町市博物館友の会

第１表　旧博物館の入館者数の推移（1）

年　度	大　人			小　人			合　計 （　）内団体数		備　考
	個人	団体（数）		個人	団体（数）				
昭和54（1979）									博物館開館・友の会設立 入館料無料
昭和55（1980）									入館料無料
昭和56（1981）	7,401	8,215	(235)	3,387	1,997	(43)	21,000	(278)	入館料100円
昭和57（1982）	10,309	6,108	(226)	3,875	2,841	(56)	23,133	(282)	
昭和58（1983）	10,291	5,651	(205)	2,854	2,478	(52)	21,274	(257)	
昭和59（1984）	11,396	7,574	(205)	2,383	2,273	(34)	23,626	(239)	開館・友の会設立5周年
昭和60（1985）	7,266	5,559	(179)	3,120	1,370	(29)	17,275	(208)	越後縮資料重文指定
昭和61（1986）	8,787	5,700	(205)	6,755	3,551	(57)	24,793	(262)	郷土植物園開園
昭和62（1987）	7,434	6,637	(219)	3,904	2,030	(40)	20,005	(259)	
昭和63（1988）	10,274	4,718	(152)	3,207	1,869	(35)	20,068	(187)	遺跡ひろば開場 博物館増築工事
平成元（1989）	11,442	3,850	(123)	3,538	1,972	(41)	20,802	(164)	開館・友の会設立10周年
平成2（1990）	10,166	3,075	(126)	2,191	1,116	(22)	16,548	(148)	
平成3（1991）	9,899	5,837	(189)	3,297	1,819	(38)	20,852	(227)	積雪期用具重文指定 新館考古展示室オープン
平成4（1992）	10,460	4,908	(126)	3,099	2,138	(46)	20,605	(172)	笹山遺跡出土品重文指定 入館料200円
平成5（1993）	10,074	4,958	(134)	3,268	1,943	(45)	20,243	(179)	
平成6（1994）	9,678	2,889	(94)	2,956	1,623	(41)	17,146	(135)	開館・友の会設立15周年 新館考古展示室オープン
平成7（1995）	11,979	3,819	(115)	2,365	1,879	(53)	20,042	(168)	
平成8（1996）	11,255	4,592	(124)	2,011	1,598	(40)	19,456	(164)	
平成9（1997）	12,890	4,467	(130)	1,641	2,258	(62)	21,256	(192)	
平成10（1998）	13,718	2,985	(85)	1,803	1,350	(33)	19,856	(118)	
平成11（1999）	21,337	5,540	(159)	2,811	3,394	(65)	33,082	(224)	開館・友の会設立20周年 笹山遺跡出土品国宝指定
平成12（2000）	15,252	5,150	(134)	1,886	2,072	(49)	24,360	(183)	入館料500円 第1回大地の芸術祭
平成13（2001）	12,162	3,365	(91)	1,561	1,903	(42)	18,991	(133)	
平成14（2002）	11,368	2,230	(60)	1,720	1,429	(32)	16,747	(92)	
平成15（2003）	11,313	2,981	(81)	1,624	1,495	(27)	17,413	(108)	第2回大地の芸術祭
平成16（2004）	8,568	2,715	(77)	1,470	1,075	(31)	13,828	(108)	開館・友の会設立25周年 中越大震災（10/23）
平成17（2005）	10,829	1,458	(46)	1,398	2,431	(54)	16,116	(100)	入館料200円（団体150円）、 12月から豪雪
平成18（2006）	14,322	2,771	(76)	1,776	2,627	(69)	21,496	(145)	入館料300円（団体250円）、 第3回大地の芸術祭
平成19（2007）	11,663	2,384	(78)	1,356	3,294	(83)	18,697	(161)	中越沖地震（7/16）
平成20（2008）	10,617	2,261	(67)	1,519	2,668	(55)	17,065	(122)	
平成21（2009）	12,766	1,969	(47)	1,840	2,141	(49)	18,716	(96)	開館・友の会設立30周年 第4回大地の芸術祭

（大人は高校生以上・小人は中学生以下、団体は20人以上・小人の団体は学校単位）

第２表　旧博物館の入館者数の推移（2）

年　度	大　人			小　人			合　計 （　）内団体数		備　考
	個人	団体（数）		個人	団体（数）				
平成22（2010）	10,778	1,431	(43)	1,964	1,661	(41)	15,834	(84)	東日本大震災（3/11） 長野県北部地震（3/12）
平成23（2011）	9,511	1,169	(33)	1,542	1,508	(45)	13,730	(78)	
平成24（2012）	15,493	1,138	(38)	2,001	1,630	(39)	20,262	(77)	第5回大地の芸術祭
平成25（2013）	11,241	806	(26)	1,250	1,461	(34)	14,758	(60)	
平成26（2014）	12,518	768	(30)	1,063	1,510	(38)	15,859	(68)	開館・友の会設立35周年 友の会員入館無料化
平成27（2015）	15,552	1,114	(36)	1,636	1,344	(27)	19,646	(63)	第6回大地の芸術祭
平成28（2016）	12,636	1,232	(37)	1,164	1,405	(32)	16,437	(69)	
平成29（2017）	12,033	962	(32)	1,251	1,126	(26)	15,372	(58)	
平成30（2018）	13,198	780	(27)	1,374	1,045	(32)	16,397	(59)	第7回大地の芸術祭
令和元（2019）	9,537	1,042	(32)	1,195	566	(8)	12,340	(40)	開館・友の会設立40周年 新館開館準備のため休館 （12/2～）
総　計	447,373	134,808	(4,122)	89,055	73,890	(1,645)	745,126	(5,767)	

（大人は高校生以上・小人は中学生以下、団体は20人以上・小人の団体は学校単位）

第３表　これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）（1）

年　度	特別展・企画展等の名称（期間）
昭和54（1979）	「越後のちぢみ展」（4/27～5/20）、「木の文化展」（8/4～31）、「星襄一遺作展」（10/12～14）、「菊と刀展」（10/27～11/4）、「雪の民具展」（2/7～29）
昭和55（1980）	「明石ちぢみ展」（5/1～6/8）、「新潟県の画家たち展」（8/9～17）、「庚申さまと庚申信仰展」（10/26～11/9）、「雪と雪の民具展」（2/13～22）
昭和56（1981）	「越後ちぢみと明石ちぢみ展」（5/3～6/7）、「日本の郷土玩具展」（11/1～8）
昭和57（1982）	「妻有の画人たち展」（8/25～29）、「妻有の文化財展」（10/30～11/7）
昭和58（1983）	「妻有の衣食住展」（8/10～31）、「近代日本洋画の巨匠たち展」（11/1～6）
昭和59（1984）	「日本画、洋画、巨匠たちの世界展」（9/1～5）、「明治、大正、昭和100枚の写真展」（10/20～11/4）、「目で見る十日町の歴史展」（11/11・中条公民館新座分館、2/8～17・下条公民館）
昭和60（1985）	「広重・東海道五十三次展」（9/1～5）、「全日写連写真展」（10/3～6）、「戦中・戦後のくらし展」（11/22～12/8）、「雪の造形写真展」（11/3・中条公民館大井田分館）
昭和61（1986）	「重文・越後縮資料展」（4/10～7/20）、「世界の大昆虫展」（8/26～9/7）、「女性をえがく展」（10/8～12）、「明治・大正・昭和写真展」（11/2～3・水沢公民館）
昭和62（1987）	「大正浪漫明石ちぢみの世界展」（4/9～5/17）、「信濃川の魚と漁法展」（8/23～27）、「妻有の画人たち展Ⅱ」（10/17～25）、「雪の中のくらし写真展」（2/12～14）、「小坂遺跡と縄文人のくらし」（10/25・吉田公民館鐙島分館）
昭和63（1988）	「冬の生活用具展」（4/30～5/29）、「デザイン亀倉雄策展」（8/21～28）、「市史編さん資料展」（10/8～16）、「越後縮名品展」（2/10～12）、「昔のくらし写真展」（10/23・吉田公民館名ヶ山分館）、「水沢地域の城と館と遺跡展」（11/3～6・水沢公民館他）
平成元（1989）	博物館開館・友の会設立10周年記念「池田満寿夫展」（10/21～29）、「妻有の百三十三番写真展」（11/5～12・水沢公民館他）
平成2（1990）	「妻有の職人と道具展」（4/28～5/20）、「近世妻有俳諧と系譜展」（8/11～9/2）、「雪の造形と文様展」（10/13～21）、「幅上遺跡速報展」（11/3・吉田公民館鐙島分館）
平成3（1991）	「十日町の積雪期用具展」（8/11～9/1、2/8～16）、「大新田遺跡の調査記録」（10/27・鐙島小学校）
平成4（1992）	「積雪期用具展」（4/25～5/31）、「竹久夢二展」（10/10～26）

第４表　これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）（２）

年　　度	特別展・企画展等の名称（期間）
平成5（1993）	「星襄一とスノリア展」（6/5～20）、「浮世絵名品展－中右コレクション」（10/9～25）、「カウカ平Ａ・Ｂ遺跡・高島南原Ａ・Ｂ遺跡調査記録」（10/31・鐙島小学校）
平成6（1994）	開館・友の会設立15周年／市政施行40周年記念「棟方志功展」（10/8～23）、「高橋喜平・雪の造形写真展」（2/16～20）、「中道・思川遺跡の調査」（10/30・真田小学校他）
平成7（1995）	「手工芸の美－編・組・刺繍三人展」（6/17～7/2）、「富士の写真家・岡田紅陽生誕100年記念展」（10/7～22）、「上梨子Ａ・Ｂ遺跡調査」（11/5・西小学校）
平成8（1996）	「発掘調査速報展－平成3～7年度分」（6/15～30）、「縄文の美－火焔土器の系譜」（9/28～10/27）
平成9（1997）	「十日町の文化財展」（5/17～6/8）、「中条地区の遺跡調査」（10/25～26・中条小学校）
平成10（1998）	「インド先住民族アート展」（ミティラー美術館共催・4/17～5/5）、「妻有のいしぶみ展」（10/6～11/15）、第50回雪まつり記念「高橋喜平写真展－雪花譜」（2/19～21）
平成11（1999）	笹山遺跡出土品国宝指定記念「縄文の美パートⅡ－火焔型土器の世界」（8/21～10/10）
平成12（2000）	「縄文の祭祀」（9/22～10/22）、「くらしの美　思い出の品々」（2/16～18）、「笹山遺跡とその出土品展」（6/3～4）
平成13（2001）	「民具からみた縄文の用具1－編・織用具と装身具－」（6/2～24）、「民具からみた縄文の用具2－食料調達と食事の用具－」（9/22～10/14）、「博物館収蔵資料展－越後縮を中心として－」（2/15～17）、「野首遺跡展」（11/4・下条公民館上新田分館）
平成14（2002）	「現代アートに挑戦するインド民族アートの世界展」（ミティラー美術館共催・4/26～5/19）、「きものでつづる十日町の歩み」（6/15～30）、雪文化三館提携10周年記念「北越雪譜と魚沼の風土」（10/26～11/10）、「博物館収蔵資料展－十日町のきものから－」（2/14～16）
平成15（2003）	全国大井田氏サミット10周年記念「大井田健一　父祖の地を描く」（5/17～6/8）、大地の芸術祭協賛「大地の息吹き－十日町の火焔型土器－」（7/20～9/7）、きもの歴史館開館記念「越後縮の文様と美」（10/4～28）、「収蔵資料展－暮らしを彩る着物と品々－」（2/20～22）
平成16（2004）	国宝指定5周年記念「国宝と地域の宝物－十日町の火焔型土器Ⅱ－」（6/1～30）、「博物館と友の会の四半世紀」（7/10～25）、市制施行50周年記念「十日町市50年の歩みと暮らし」（9/29～11/3）、火焔街道博学連携プロジェクト「子ども縄文研究展」（11/21～12/25）
平成17（2005）	「女性の着物と装い－髪飾り・櫛と簪と笄と－」（6/11～7/3）、「博物館収蔵資料展－生活用具を中心に－」（8/9～21）、「カストリ雑誌・戦後出版文化の一断面－西潟浩平コレクション－」（8/9～21）、「新・十日町市の宝物－地域に息づく文化財－」（10/8～11/6）、「子ども縄文研究展」（11/20～12/4）
平成18（2006）	「越後の布－暮らしの中の着物－」（7/22～9/10）、「梵字・曼荼羅展」（10/7～22）、「子ども縄文研究展」（11/23～12/6）、「博物館収蔵資料展－きものと資料と孔版画－」（2/16～18）
平成19（2007）	「十日町のやきもの－縄文時代草創期、火焔型土器、そして妻有焼へ－」（8/25～9/24）、「残された雪国の記憶－雪国の暮らしを写す－」（10/6～11/4）、「出土品が語る新潟の歴史」（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団共催・11/10～12/9）、「子ども縄文研究展」（12/22～1/14）、「博物館収蔵資料展－軸物を中心に－」（2/16～18）
平成20（2008）	「十日町市の中世遺跡－発掘された集落・居館－」（8/12～9/15）、「岡田紅陽富士写真展」（10/11～26）、「博物館に寄託・寄贈された考古資料」（11/8～24）、「子ども縄文研究展」（12/20～1/12）、「博物館収蔵資料展－着物を中心に－」（2/20～22）、雪文化三館提携事業「雪と人が織りなす文化」（9/13～15・長岡市中央図書館）
平成21（2009）	博物館開館・友の会設立30周年記念「縄文人の道具箱　野首遺跡展」（8/1～9/13）
平成22（2010）	「壊されるモノ－土偶・石棒・石皿からみた縄文の祭祀－」（7/31～9/5）、「信濃川上・中流域の縄文時代草創期遺跡」（11/2～28）
平成23（2011）	「縄文のKAZARI－顔を飾る縄文人－」（7/30～9/11）、「十日町市内遺跡発掘調査速報展」（11/26～3/25）
平成24（2012）	「四大麻布－越後縮・奈良晒・高宮布・越中布の糸と織り－」（7/21～8/19）、「異形の縄文土器」（9/22～11/4）、「昭和の残映－博物館に寄贈された昔の資料－」（2/2～3/3）、「縄文の華　十日町市の国宝・火焔型土器展」（8/3～9/30・星と森の詩美術館）
平成25（2013）	「箱の中の虫－昆虫博士・樋熊清治氏標本コレクション－」（7/20～8/25）、「ビジュアル縄文博物館－縄文人の衣食住、そして土器－」（9/21～11/10）、「子ども縄文研究展2013」（1/18～2/16）
平成26（2014）	博物館開館・友の会設立35周年記念「松代の石仏－里山の祈りと信仰－」（7/19～8/24）、「縄文前期のムラ　赤羽根遺跡－火焔型土器の出現前夜－」（9/27～11/9）、「子ども縄文研究展2014」（1/17～2/15）
平成27（2015）	「カストリ雑誌とその時代－西潟浩平氏コレクション－」（7/25～8/30）、「縄文後期の墓　栗ノ木田遺跡－縄文人の死と弔い－」（10/3～11/8）、「子ども縄文研究展2015」（1/16～2/21）

第５表　これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）（３）

年　　度	特別展・企画展等の名称（期間）
平成28（2016）	「館蔵資料展　市民からの贈り物」（7/30～8/28）、「土器づくりの考古学」（10/1～11/6）、「子ども縄文研究展2016」（1/14～2/19）
平成29（2017）	「野首遺跡出土品のすべて」（7/8～8/27）、新潟県埋蔵文化財センター巡回展「縄文の造形美－六反田南遺跡－」（7/8～8/27）、「動物の意匠－人と生き物のかかわり－」（9/30～11/5）、雪文化三館提携25周年記念展「雪と生活」（9/14～11/20）、「子ども縄文研究展2017」（1/20～2/18）、「十日町のきもの歴史展」（5/3～4・十じろう）、「野首遺跡出土品展」（11/5・下条中学校）
平成30（2018）	「十日町のきもの歴史展」（5/8～27）、「縄文土器繚乱－十日町市の土器いろいろ－」（7/28～8/26）、「機織りのムラ　馬場上遺跡」（9/29～11/4）、「子ども縄文研究展2018」（1/4～2/17）、「十日町のきもの歴史展」（5/3・十じろう）
令和元（2019）	「十日町のきもの歴史展」（5/8～26）、博物館開館・友の会設立40周年記念「博物館と友の会　40年の歩み」（7/27～9/16）、「十日町のきもの歴史展」（5/3・十じろう）

第６表　旧博物館で開催された博物館講座（１）

年　　度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
昭和60（1985）	十日町を知る ① 6/12「考古学から見た十日町」阿部恭平（十日町市博物館学芸員）、② 6/28「信濃川と河岸段丘－十日町の地勢－」仲野浩平（津南中学校教諭）、③ 7/9「十日町織物の歴史と文化」佐野良吉（十日町織物工業協同組合参与）、④ 8/30「十日町の文化財と織物工場視察」佐野良吉（同）、⑤ 9/10「子供と民俗行事」駒形駆（川西高校校長）、⑥ 10/8「十日町の雪の記録から（雪の科学－十日町の雪の特徴－）」渡辺成雄（林業試験場十日町試験地主任）、⑦ 11/19「雪処理の科学技術－雪国の今日と明日－」栗山弘（科学技術庁国立防災科学技術センター雪害実験研究所）、⑧ 12/3「学校教育と博物館」竹内俊道（十日町市博物館学芸員）
昭和61（1986）	十日町を知るⅡ ① 4/22「博物館と学校教育」竹内俊道（十日町市博物館学芸員）、② 5/9「越後縮資料は語る」滝沢秀一（十日町市博物館調査研究員）、③ 5/21「十日町の城跡」丸山克己（十日町市史編さん室主査）、④ 6/10「十日町織物の歴史と現況－織物工場視察－」佐野良吉（十日町織物工業協同組合参与）、⑤ 7/9「信濃川の水害と治水」須藤重夫（十日町市史編さん委員）、⑥ 8/29「秋山の民具と河岸段丘－津南方面視察－」仲野浩平（津南中学校教諭）、⑦ 9/4「昆虫の世界」滝沢伸介（日本アジア虫の会）、⑧ 11/5「雪国の生活　今と昔」渡辺成雄（前林業試験場十日町試験地主任十日町）・駒形駆（川西高校校長）・星名甲子郎（雪と生活研究会幹事長）
昭和62（1987）	自分たちの住む町を知ろう ① 6/27「武士の戦いと日常（上杉時代の妻有）－城館跡を訪ねてⅠ－」丸山克己（十日町市史編さん室主査）、② 7/11「新田一族の進出と妻有地方の中世」佐野良吉（十日町織物工業協同組合参与）、③ 7/25「遺跡が語る大昔のくらし－原始から古代へ－」大島伊一（十日町市文化財保護審議会委員）、④ 8/1「幕藩体制と妻有の村々」須藤重夫（十日町市史編さん委員会近世史部会長）、⑤ 8/8「妻有の大地はどのようにしてできたか－信濃川と河岸段丘の形成－」仲野浩平（津南中学校教諭）、⑥ 8/29「村と庄屋と庶民たち」上村政基（十日町市史編さん委員会近・現代史部会長）、⑦ 9/5「大井田氏とその周辺－城館跡を訪ねてⅡ－」佐野良吉（十日町市史編さん委員会副委員長）・丸山克己（十日町市史編さん室主査）、⑧ 9/19「会津戦争と妻有の人々」金子幸作（川西町教育委員長）
昭和63（1988）	妻有・十日町地方の心をさぐる ① 5/14「自然の中の神々－自然と人々－」桜井徳太郎（十日町市史監修者・駒沢大学学長）、② 5/21「妻有地方の野仏たち－人々の願い①－」上村政基（十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員）、③ 5/28「妻有地方への仏教の広がり－人々の願い②－」竹内道雄（十日町市史編さん委員長・愛知学院大学教授）、④ 6/11「村の神さま－人々の願い③－」駒形駆（十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員）、⑤ 6/18「村の中の相互扶助－暮らしと助合い①－」滝沢秀一（日本民俗学会会員・十日町市史編さん調査員）、⑥ 6/25「飢餓の中の救世主－暮らしと助合い②－」本山幸一（十日町市史編さん調査員・中越教育事務所指導主事）、⑦ 7/2「妻有地方の教育のあけぼの－教育と文化①－」佐野良吉（十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員）、⑧ 7/9「戦後の文化を育んだ人々－教育と文化②－」田村喜一（十日町市博物館協議会副委員長・市史編さん調査員）
平成元（1989）	妻有の人物史Ⅰ ① 5/27「坂下門外で斃れた勤皇の志士　河本杜太郎（正安）」佐野良吉（十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員）、② 6/3「諏訪山の天狗が庶民の悩みを代弁　服部泰庵」上村政基（十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員）、③ 6/24「麻から絹へ、十日町織物再生の功労者　宮本茂十郎」滝沢栄輔（十日町市博物館協議会委員長・市史編さん調査員）、④ 7/8「江戸の名医、現代漢方医学の祖　尾台良作（榕堂）」須藤重夫（十日町市史編さん委員）、⑤ 7/22「学問振興と人材育成に尽くした教育者　高橋茂一郎（翠村）」田村喜一（十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん調査員）

第７表　旧博物館で開催された博物館講座（２）

年　　度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
平成２（1990）	妻有の人物史Ⅱ ① 7/14「十日町織物の近代化に尽くした人々　根津五郎右衛門・蕪木八郎右衛門」佐野良吉（十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員）、② 7/21「多くの偉材を育てた学徳兼備の高僧惟寛和尚をとりまく人々」渡辺賢一（円通寺住職）、③ 7/28「江戸相撲の名行司木村瀬平と幕末の相撲界」田村喜一（十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん委員）、④ 8/4「日本三竹の１人と称された竹画の巨匠木村雪翁と大肝煎・関口家」上村政基（十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん委員）、⑤ 8/11「近世妻有の俳諧の系譜をたどる　根津桃路・上村山之・青山幽嘯」須藤重夫（十日町市史編さん委員）
平成３（1991）	時間（とき）の軌跡をたずねて ① 7/13「中世編　戦乱と武士（もののふ）たちー妻有の中世ー」山田邦明（東京大学史料編纂所所員）、② 7/20「古代編　古代史のなかの越後と妻有」小林昌二（新潟大学人文学部教授）、③ 7/28「原始編　縄文の生活様式ー適応と創造ー」渡辺誠（名古屋大学文学部教授）
平成４（1992）	雪の中の暮らしを考える ① 8/22「雪の科学と雪害の防止」中村勉（長岡雪氷防災研究所所長）、② 8/29「雪国の風土と文化」高橋実（小千谷高校教諭）、③ 9/5「雪とともに生きる暮らし」鈴木哲（新潟大学工学部教授）
平成５（1993）	戦国乱世の人物像 ① 8/7「戦国時代の妻有」山田邦明（東京大学史料編纂所所員）、② 8/14「描かれた中世ー洛中洛外図の中の人々ー」石田尚豊（聖徳大学教授）、③ 8/21「中世越後の豪族たち」阿部洋輔（新発田高校教諭）、④ 8/28「戦国大名とはなんだったのか」藤木久志（立教大学教授）
平成６（1994）	絵図面が語る郷土の歴史 ① 6/4「地図や絵図から歴史を読む」青山宏夫（新潟大学助教授）、② 6/11「絵図面に見る山の論争」木村秀彦（柏崎農業高校・高柳分校教諭）、③ 6/18「村絵図から見た河岸段丘の開発」松永靖夫（元三条高校教諭）
平成７（1995）	太平記からの贈物ー信濃川中流域の中世ー Ⅰ学習ツアー　6/8～9「越後から鎌倉へー新田義貞の鎌倉攻めを追うー」佐野良吉（十日町市史編さん委員）、Ⅱ史跡探訪　7/22「関東への道」丸山克己（十日町市史編さん室室長補佐）、Ⅲ講座（講義）　① 8/5「越後の新田一族ーその活躍と悲劇」赤澤計真（新潟大学人文学部教授）、② 8/12「中世の武士（もののふ）たちー戦いのありさま」山田邦明（東京大学史料編纂所助教授）、③ 8/19「中世の精神世界へ①ー佛像・祈りのかたちー」西川新次（慶應義塾大学名誉教授）、④ 8/26「中世の精神世界へ②ー念仏・遊行の聖と民衆ー」大橋俊雄（日本文化研究所講師）
平成８（1996）	縄文の技とこころ ① 7/14「縄文からのメッセージー魅惑の真脇びとー」加藤三千雄（能都町真脇遺跡展示室）、② 7/28「縄文心象ー日蝕土器の系譜ー」武居幸重（諏訪縄文文化研究会）、③ 8/11「縄文生活の再現ー実験考古学入門ー」楠本政助（石巻考古学研究所）、④ 8/25「縄文人の共同性」後藤和民（創価大学教授）
平成９（1997）	十日町市史を読むⅠー江戸時代の社会と人々ー ① 9/13「村の掟（おきて）ー村決でみる盗みへの制裁ー」本田雄二（長岡高校教諭）、② 9/20「善光寺街道と松之山街道」桑原孝（十日町市史編さん委員）、③ 9/27「縮問屋と奉公人」杉本耕一（新潟高校教諭）、④ 10/4「妻有俳諧の先駆者たちー上村山之と根津桃路ー」須藤重夫（十日町市文化財保護審議会委員）、⑤ 10/11「飢饉と村の生活ー農民たちの危機管理ー」本山幸一（十日町市史編さん委員）、⑥ 10/18「日記にみる農家の一年」松永靖夫（農学博士）、⑦ 10/25「山の利用と紛争ー六箇村の入会ー」（堀之内高校教諭）
平成10（1998）	十日町市史を読むⅡー近・現代の諸相ー ① 7/25「自由民権運動と妻有の風土」本間恂一（新潟県政記念館館長）、② 8/1「十日町産地は大火の危機をどのように克服したかー染織学校の設立と中村喜一郎先生ー」佐野良吉（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 8/8「ほくほく線への長い道のりー鉄道誘致運動の苦闘」上村政基（十日町市文化財保護審議会委員）、④ 8/22「雪国のこどもたちーわらべ歳時記ー」駒形慰（新潟県民俗学会会長）、⑤ 8/29「娯楽の王様・映画と若者」田村喜一（十日町市文化財保護審議会委員）
平成11（1999）	十日町市史を読むⅢー原始・古代・中世の十日町ー ① 7/24「火焔土器の時代ー笹山遺跡を中心にー」小熊博史（長岡市立科学博物館）、② 7/31「古代の人々のくらし」高橋勉（新井市教育委員会）、③ 8/7「越後の中世考古学と妻有郷の遺跡」鶴巻康志（新発田市教育委員会）
平成12（2000）	縄文研究最前線・縄文時代はここまでみえてきたー現代人のための縄文講座ー ① 7/29「縄文人の住環境ー縄文人の住居を調べるー」荒川隆史（財・新潟県埋蔵文化財調査事業団主任調査員）、② 8/5「縄文時代の生活復元ー縄文人の暮らしを見つめるー」渡辺裕之（新潟県立歴史博物館主任学芸員）、③ 8/12「縄文世界の精神風土ー縄文の記憶を追ってー」原田昌幸（文化庁美術工芸課文化財調査官）、④ 8/19「縄文人の交流と交易ー奥三面から見えてきたことー」高橋保雄（朝日村奥三面遺跡調査室係長）
平成13（2001）	モノと暮らしの知恵を学ぶー道具と技術を考えるー ① 7/28「石の利用法ー石器と石製品ー」前山精明（巻町教育委員会学芸員）、② 8/4「民具と道具」久保禎子（一宮市博物館学芸員）、③ 8/11「縄文時代の道具箱」宮尾亨（新潟県立歴史博物館学芸員）、④ 8/18「縄文の工芸技術」小柴吉男（三島町文化財専門委員）

第８表　旧博物館で開催された博物館講座（３）

年　　度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
平成14（2002）	道・人と地域をつなぐものー地域と文化の交流を考えるー ① 7/27「善光寺街道をゆく人々」丸山克己（前十日町情報館長）、② 8/3「織物技術の伝播を追って」坂本育男（福井県立博物館学芸員）、③ 8/10「塩の道を歩く」土田孝雄（糸魚川市文化財保護審議会委員）、④ 8/17「海上の道ー交易と交流ー」藤本強（國學院大學教授）
平成15（2003）	時の記憶を手がかりにー資料から歴史を読み解くー ① 7/26「仏像が語りかけるものーその心とかたちー」川村知行（上越教育大学助教授）、② 8/2「古文書から見えてくること」本井晴信（新潟県立文書館専門文書研究員）、③ 8/9「その後の大井田氏を追って」佐野良吉（新潟県民藝協会会長）、④ 8/23「石佛・石塔の分布は語るー地域の信仰と歴史ー」渡辺三四一（柏崎市立博物館学芸員）
平成16（2004）	地域をつなぐ物語ー郷土の歴史と文化を訪ねてー ① 7/31「中里編　桔梗原の開田ー庄屋・村山家の人々ー」村山詔平（中里地域開発㈱マネージャー）、② 8/7「十日町編　縮問屋の台所事情」丸山克己（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 8/21「川西編　板碑は語るー中世の世界ー」千々和到（國學院大學教授）、④ 8/28「松代・松之山編　松代・松之山の歴史散歩」鈴木栄太郎（上越市史編さん室専門員）
平成17（2005）	地域をつなぐ物語Ⅱー郷土の歴史と文化を訪ねてー ① 7/23「新市域の自然と景観ーこの素晴らしき大地ー」井上信夫（十日町市文化財保護審議会委員）、② 7/30「新市域の街道と山城ー古い歴史を刻む大地ー」丸山克己（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 8/6「川西・中里の文化財ー現地見学ー」星名寔（十日町市文化財保護審議会委員）、④ 8/20「松代・松之山の文化財ー現地見学ー」鈴木栄太郎（十日町市文化財保護審議会委員）
平成18（2006）	災害の歴史から郷土を学ぶ ① 7/29「松之山の地すべりー大地が動くー」村山悦夫（松之山教育事務所社会教育指導員）、② 8/5「十日町の大火始末記ー焦土から立ち上がるー」佐野良吉（郷土史研究家）、③ 8/19「日本の大地震と郷土の人々ー大地が震えるー」須藤重夫（郷土史研究家）
平成19（2007）	魚沼を学ぶ ① 7/21「魚沼の文化交流を探るー鈴木牧之の交友からー」貝瀬香（鈴木牧之記念館学芸員）、② 7/28「白の世界に魅せられてー富岡惣一郎と魚沼ー」高石真理子（トミオカホワイト美術館学芸員）、③ 8/4「魚沼の大地と火焔型土器ー故郷の縄文時代ー」石原正敏（十日町市博物館学芸員）
平成20（2008）	魚沼を学ぶⅡ ① 7/19「原始の魚沼ー縄文時代を中心にー」石原正敏（十日町市教育委員会）、② 7/26「古代の魚沼ー古墳時代を中心にー」安立聡（南魚沼市教育委員会）、③ 8/2「中世の魚沼ー魚沼地方の中世城館跡の特徴ー」鳴海忠夫（新潟県考古学会会員）、④ 8/9「魚沼楽（学）のススメ」佐藤雅一（津南町教育委員会）
平成21（2009）	大河ドラマ「天地人」を学ぶ ① 7/4「考古学的に見た坂戸城跡ー居館跡を中心としてー」藤原敏秀（南魚沼市教育委員会）、② 7/11「史料から探る直江兼続の妻おせん」田中洋史（長岡市立中央図書館文書資料室）、③ 7/18「会津120万石と「直江状」」福原圭一（上越市総務課公文書館準備室）
平成22（2010）	新潟県の考古学最前線 ① 7/3「新潟県の縄文時代遺跡ー近年の発掘調査成果を中心にー」渡辺裕之（新潟県教育庁文化行政課）、② 7/10「弥生時代研究の現在（いま）」古澤妥史（阿賀野市教育委員会生涯学習課）、③ 7/17「越後で古墳が造られたころー魚沼地方の古墳人（びと）の暮らしー」尾崎高宏（財・新潟県埋蔵文化財調査事業団） 考古資料からみた十日町市の歴史 ① 9/18「縄文時代①　遺跡の調査からわかる縄文人のくらしー前・中期を中心にー」石原正敏（十日町市博物館学芸員）、② 10/2「中世　十日町に武士がいたころー中世の人々の暮らしー」菅沼亘（十日町市博物館学芸員）、③ 10/16「縄文時代②　土の器を作り始めた頃の十日町ー久保寺南遺跡を中心に佛像・祈りー」笠井洋祐（十日町市博物館学芸員）
平成23（2011）	新潟県の考古学最前線Ⅱ ① 7/2「発掘が語る古代の越後・佐渡」春日真実（財・新潟県埋蔵文化財調査事業団）、② 7/9「新潟平野の舟運から古代・中世の流通を復元するー近年の研究成果からー」鶴巻康志（新発田市教育委員会生涯学習課）、③ 7/16「越後における肥前陶磁器の流通」安藤正美（見附市教育委員会教育総務課）
平成24（2012）	郷土の遺産Ⅰ　越後縮 ① 6/16「越後縮の歴史」竹内俊道（前十日町市博物館長）、② 6/23「御用縮の世界ー受注から納品までー」丸山克己（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 6/30「越後縮と江戸時代の麻布産地」吉田真一郎（近世麻布研究所）
平成25（2013）	郷土の遺産Ⅱ　自然 ① 6/15「段丘に記録されている自然災害を考える」卜部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所准教授）、② 6/22「雪里・十日町市の特徴的な昆虫たち」鶴智之（越後松之山森の学校キョロロ研究員）、③ 6/29「多雪地の植物たちの多様な生き方とそのめぐみ」小林誠（越後松之山森の学校キョロロ研究員）

第９表　旧博物館で開催された博物館講座（４）

年　　度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師
平成26（2014）	郷土の遺産Ⅲ　石仏 ① 6/14「下越の石仏と民俗行事」大楽和正（新潟県立歴史博物館研究員）、② 6/21「中越ぶらり石仏探訪－ぶらり出かけ、めぐりあった路傍の石仏あれこれ－」桑原和位（つまり石仏の会会員）、③ 6/28「大光寺石と石仏」大坪晃（新潟県石仏の会会員）
平成27（2015）	郷土の遺産Ⅳ　火焔型土器 ① 6/13「科学の目で見る火炎土器」宮内信雄（十日町市博物館調査研究員）、② 6/20「火焔型土器のつくり方」宮尾亨（新潟県立歴史博物館専門研究員）、③ 6/27「美術から見た縄文土器－火焔型土器の登場－」鈴木希帆（東京国立博物館アソシエイトフェロー）
平成28（2016）	郷土の遺産Ⅴ　野首遺跡土器の魅力 ① 6/11「千曲川流域の土器のお手本－長野県から見た野首遺跡出土土器－」寺内隆夫（長野県立歴史館上席学芸員）、② 6/18「火炎土器と野首遺跡」寺﨑裕助（新潟県考古学会会長）、③ 6/25「利根川上流域から見た野首遺跡中期土器群」山口逸弘（公財・群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員）
平成29（2017）	郷土の遺産Ⅵ　雪 ① 6/10「北越雪譜を著した鈴木牧之」貝瀬香（南魚沼市図書館）、② 6/17「北越雪譜に見る雪国のくらし」笛木孝雄（南魚沼市文化財保護審議会会長）、③ 6/24「雪国の行事と食文化」大楽和正（新潟県立歴史博物館主任研究員）
平成30（2018）	郷土の遺産Ⅶ　信濃川 ① 6/9「信濃川と旧石器・縄文人の関わりについて」佐藤信之（津南町農と縄文の体験実習館なじょもん）、② 6/16「信濃川の河岸段丘－変動する大地の証拠－」竹之内耕（フォッサマグナミュージアム）、③ 6/23「信濃川の木造船について」森行人（新潟市歴史博物館みなとぴあ）
令和元（2019）	郷土の遺産Ⅷ　編布と織布 ① 6/15「奥会津昭和村のカラムシ栽培－日本各地と台湾の事例－」菅家博昭（昭和村文化財保護審議会委員長）、② 6/22「縄文時代の編布－織布以前を考える－」松永篤知（金沢大学資料館特任教授）、③ 6/29「上杉謙信・景勝と青苧」福原圭一（上越市公文書センター上席学芸員）

第 10 表　分じろう まちの文化歴史コーナー HAKKAKE の展示（2016 ～ 2021 年度）

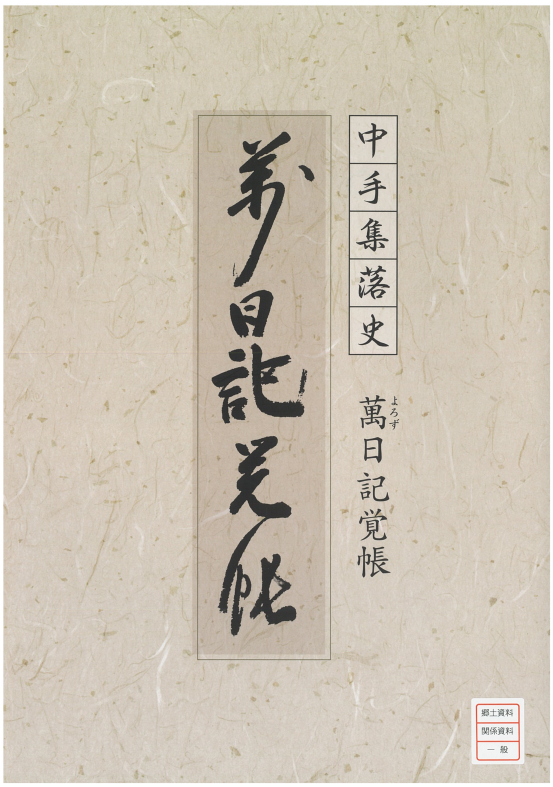
年　　度	HAKAKKEの展示（期間）
平成28（2016）	「国宝・火焔型土器№.１レプリカ」（4/下～6/3）、「国宝・火焔型土器№.５」（6/4～6/5）、「越能山都登」（6/6～7/1）、「長徳寺板碑」（7/2～10/3）、「中島遺跡出土品」（10/5～11/7）
平成29（2017）	「中島遺跡出土土器」（～5/2）、国宝・笹山遺跡出土品（5/3）、「中島遺跡出土土器」（5/4～5/29）、「十日町織物歴代見本帳」（5/31～7/31）、「縄文人の巨大ピアス－樽沢開田遺跡出土品－」（8/2～9/22）、「国宝・笹山遺跡出土品」（9/23～9/24）、「中里地域の釜神さま」（9/25～11/27）、「チンコロと節季市」（11/29～1/29）、「カンジキ・スカリー十日町の積雪期用具－」（1/31～3/26）、「茂十郎の透綾－宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地－」（3/28～）
平成30（2018）	「茂十郎の透綾－宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地－」（～5/2）、「国宝・火焔型土器№.５」（5/3）、「国宝・火焔型土器№.１ 高精細レプリカ」（5/4～5/6）、「茂十郎の透綾－宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地－」（5/8～5/28）、「威信の石槍－向田遺跡出土品－」（5/30～8/6）、「ツク（マブシ）とツク折り」（8/8～10/1）、「その硯は誰のものか－伊達八幡館跡出土品－」（10/3～12/3）、「フクベ（夕顔瓢）－十日町の積雪期用具－」（12/5～2/4）、「ワダラ」（2/6～4/1）
令和元（2019）	「清田山発見のヒシナイイワシ化石」（4/3～5/2）、「国宝・火焔型土器№.５」（5/3）、「清田山発見のヒシナイイワシ化石」（5/4～6/3）、「十日町市最古の狩猟具」（6/5～8/5）、「十日町市最古の文字」（8/7～10/7）、「弥生の小壺」（10/9～12/9）、「国宝・火焔型土器№.６」（12/10）、「唐津焼」（12/11～1/9）、「国宝・火焔型土器№.７」（1/10）、「唐津焼」（1/11～2/14）、「国宝・火焔型土器№.８」（2/15～2/16）、「中世の貨幣」（2/17～3/9）、「国宝・火焔型土器№.９」（3/10）、「中世の貨幣」（3/11～）
令和２（2020）	「中世の貨幣」（～4/9）、「石で作った斧」（4/10～6/8）、「紡錘車」（6/10～8/3）、「カルカロドン歯の化石」（8/5～10/12）、「イッカク（一角）の角」（10/14～12/7）、「珠洲焼の壺」（12/9～2/8）、「縄文土器と蓋」（2/10～）
令和３（2021）	「縄文土器と蓋」（～4/5）、「縄文土器の中に入った縄文土器」（4/7～6/7）、「古墳時代の器の形」（6/9～8/2）、越中富山の（8/4～10/4）、「動物意匠のついた縄文土器」（10/6～12/6）、「マジョリカお召とマジョリカ陶器」（12/8～2/7）、「弥生時代の土器」（2/9～）

新刊紹介

中手集落史「萬日記覚帳」

中手地域づくり会　編　2020 年 10 月発行　A4 版 207 頁

阿部　敬



この本を手に取ったのは、まだ刊行間もないころ、当博物館に寄贈されて事務室の「今月の図書」にあったからではなかったか。十日町市民の郷土愛の深さに慣れてしまったためか、その時はあまり気に留めずパラパラとめくるだけに終わったように思う。それから一年ほど経ってから、十日町情報館（市の中央図書館）で二度目の出会いがあった。この時ちょうど県内の年中行事の文献調査をしていたこともあり、心のアンテナが立っていたのだろう、自然と目が留まったのである。一読してみるとその内容の豊富さに驚くとともに、著者の故郷を思う気持ちに心が揺さぶられた。中手地域づくり会顧問、水落昭作氏の序にこうあった。「故郷を語り継いで大切にしたい」。なんともまっすぐな一言ではないか。

本書は大きく第１～９章と資料編とで構成されている。

第１章　中手ムラの変遷
第２章　ムラの地形と県道真田・高島線の変遷
第３章　ムラの信仰
第４章　中手川と用水・名水
第５章　生業と服飾
第６章　ムラの構成と運営
第７章　戸口の推移と仲間の連携
第８章　限界への危機と地域づくり　つぶさな観察記録
第９章　思い出集（地域づくり会員）

本書のすべてを紹介することは到底できないのでいくつか絞ってみてみたい。

第１章では、慶長５年（1600）の関ケ原の戦いで敗戦した江村藤左衛門が浪人して鐙坂村に入植し、1624 以降に中手を開いたとの伝承を記し、その後の歴史を平成 30 年まで追っている。江村氏については江村重良（1992）「江村氏考」なる手書きの文章を参照しており、それに基づくと 18 世紀前半に水内氏、19 世紀後半に高橋氏が入植したようである。ムラの始まりはしかし、「その他の資料」を加えて検討すると「最初の草分けは慶長 17 年（1612）頃ではないか」という。資料間に齟齬があるので確定はしがたいが、域内における中世から近世への移行期における開村状況を示す貴重な資料といえるかもしれない。こうした資料の丹念な積み重ねが地域史にとってどれほど重要かを思い出させてくれる。

第６章では、屋号と家系の詳細や消防団の活動などが語られている。本家・分家の関係が一覧表と住宅（屋号）配置図によって明らかにされており注意をひく。家間の関係とはつまり親族関係にほかならず、集落史の民

俗調査であれば最初に取り組まなければいけない重要課題のひとつだが、入り組んだ関係を解きほぐすのは容易ではない。労作のひとつとえよう。

明治 11 年５月に隣村である鉢（はち）の本村で火災が発生し、十二社を含む 17 戸が焼失する大火であったらしく、おそらくこれをきっかけにして明治 13 年に南・北鐙坂村防火組が組織された経緯が記されている。中手は南鐙坂村枝村だったので独立した組織は持たなかったが、大正４年には鉢・中手に公設消防組が編成されたようである。その後も含めて組織化の経緯がかなり詳しく記されている。現在の十日町市は、平成期に中越地震、中越沖地震、長野県北部地震と数年おきに３度の地震を経験し、その都度自主防災組織が活躍しており、防災意識が高いと言われる。地域の消防団の設立や経緯に対する関心の高さがこうした過去の経緯にも目を向けさせているのかもと想像した。

第８章は、少子高齢化が著しく過疎化の一途をたどっている集落が大地の芸術祭をきっかけにして、新しい地域づくりに取り組む姿を追った貴重な記録となっている。芸術祭の概要とか十日町市全体の動向のような、大きな動きを外部からとらえた記録は多く存在するが、一集落の見え方やその動き、雰囲気を内部から観察し続けた記録は多くはない気がする。集落にある人々が自ら語る「事実」を記録しつづけることが重要である。

地域づくりの核の一つに「中手の黒滝」がある。十日町市博物館 HP によると、中手の黒滝とは、「普通河川浅河原川の支流である中手川が流れ落ちる高さ約 20m、幅約 20m の滝です。」とあり、また「滝の背後には魚沼層の露頭がみられます。春には雪解け水が迫力をもって流れ落ち、秋には鮮やかな紅葉に彩られるという、優れた風致を誇ります。滝の規模は県内有数です。」とある。平成29年３月30日十日町市指定文化財（名勝　第３号）に指定されている。この指定の端緒となったのが他ならぬ地域づくり活動だった。「地域づくりの一環として先人の知恵と工夫の足跡を集落繁栄の象徴として伝えるため、黒滝周辺の環境整備に取り組むことにした。」とある。

ことの始まりは平成 27 年５月であったという。これ以後、遊歩道の整備、展望台の整備、石抱きケヤキの発見、清酒「幻の黒滝」の開発と次々と幅を広げ、平成 30 年７月には公益財団法人あしたの日本を創る協会、NHK、読売新聞が主催するアワードで、中手地域づくり会が「振興奨励賞」を受賞するに至った。地域自治活動の模範のような事例であり、まるでサクセスストーリのようにも見えるが、本書の文面からはさまざまな労苦があったことがにじみ出ており、ある意味でのリアルを伝えているようにも思える。

集落史というと、自治体発行の都道府県・市町村史の流れの末端のようにも捉えられるが、本書においてはその風合いを残しつつもあくまで内部からの視点へのこだわりが感じられる。この視点によって、行政史や制度史のようなある意味では退屈な（失礼）文字の並びに血が通い、温もりを与え、本当の意味での人々の歴史を紡いでいるように感じさせてくれる。だからこそ人の心に訴えてくるのであるのである。素晴らしい書であることはいうまでもない。

最後にひとつだけ欲を言わせてもらいたい。できることなら執筆者の膨大な知識の背景となっている諸資料・文献を記してほしいということである。「野の学問」ともいわれる民俗学ではアカデミックなルールや行政文書のような正確さに縛られないからこそ、主観的でリアルな生の体験を語りうるといわれ、もちろんそれは承知しているが、たとえば若い読者や、私のように地域史に疎いとか、調べ物をしていたりして事実を詳しく知りたいと思っている読者には、「そこの情報をもう一歩・・・」となるような気がする。集落史を後世に伝える本書の意義に照らして、是非とも資料をたどれるようにしていただければと願うのである。

しかし文献がないからといって地域の生の声をまとまった形で残すことの大切さが損なわれることは全くない。こうした書が地域を想う人々の手で形になっていることを心から喜びたい。それもまた「地域づくり」のひとつの礎となるはずである。

十日町市博物館研究紀要第 1 号

Bulltin of the Tokamachi City Museum, No.1 (March 2022)

ISSN 2437-0118

発行日　2022 年 3 月 10 日

編集・発行者　十日町市博物館

〒 948-0072　新潟県十日町市西本町一丁目 448 番地 9